



学内広報

No.1288

2004.4.14
東京大学広報委員会



平成15年度学位記授与式行われる（10ページに関連記事）

CONTENTS

特別記事	2	生物情報科学学部教育特別プログラム第一期修了生の誕生、大学院農学生命科学研究科で留学生を対象に宝井馬琴師匠の英語による講談が実施される、国際学術雑誌 The International Journal of Asian Studies 創刊記念シンポジウム「アジア研究のフロンティア」、東京大学生産技術研究所と工学系研究科社会連携推進室が新たな産学連携「未来開拓型連携」をスタート	
役員の就任、副学長の就任、副理事の就任、平成15年度卒業式行われる、卒業式総長告辞、卒業式来賓挨拶 森山眞弓前法務大臣、卒業式来賓挨拶 許智宏北京大学学長、平成15年度学位記授与式行われる、学位記授与式総長告辞（修士課程）、学位記授与式総長告辞（博士課程）、学位記授与式（修士課程）来賓挨拶 森巨元東京大学総長、学位授与式（博士課程）来賓挨拶 有馬朗人元東京大学総長			
一般ニュース	17	掲示板	32
部局長の交代、部局長退任の挨拶、学生表彰「東京大学総長賞」授与式行われる		第12回布施学術基金公開講演会のお知らせ、教養学部進学情報センター主催シンポジウムの開催、学生生活関連規程集および新しい学生懲戒処分制度に関するパブリックコメントの実施について、「教養学部報」第473（4月1日）号の発行	
キャンパスニュース	24	広報委員会	34
第2次学力試験（前期日程）の合格者、同（後期日程）第1段階選抜結果の発表、第2次学力試験（後期日程）、外国学校卒業学生特別選考の合格者発表、平成16年度入学者数決まる		第47期「淡青評論」執筆者の紹介、平成16年度学内広報発行スケジュール	
部局ニュース	29	淡青評論「グラウンドの芝生」.....	36

役員の就任

平成16年4月1日付で役員の就任がありました。以下のとおりご紹介いたします。

総長

佐々木 毅

(任期：平成16年4月～平成17年3月)



昭和40年3月 法学部卒業
昭和53年11月 教授（法学部）
平成10年4月～平成12年3月
大学院法学政治学研究科長・
法学部長
平成13年4月 総長
〔所属講座（研究部門）〕
政治学史

〔専門分野〕

政治学・政治学史

〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕

「政治学講義」「プラトンの呪縛」「現代アメリカの保守主義」「マキアヴェッリの政治思想」

理事（副学長）

小宮山 宏

担当：研究・図書館・情報・国際交流等

(任期：平成16年4月～平成17年3月)



昭和42年3月 工学部卒業
昭和47年3月 大学院工学系研究
科博士課程修了
昭和63年7月 教授（工学部）
平成12年4月～平成14年3月
大学院工学系研究科長・工学
部長
平成15年4月 副学長

〔所属講座（研究部門）〕

反応プロセス工学講座

〔専門分野〕

化学システム工学、機能性材料工学、地球環境工学

桐野 高明

担当：財務・会計・病院等

(任期：平成16年4月～平成17年3月)



昭和47年3月 医学部卒業
平成4年10月 教授（医学部）
平成11年4月～平成14年3月
大学院医学系研究科長・医学
部長
平成15年4月 副学長
〔所属講座（研究部門）〕
臨床神経精神医学講座

〔専門分野〕

脳神経外科・脳血管障害

渡辺 浩

担当：人事・組織・情報公開・国大協等

(任期：平成16年4月～平成17年3月)



昭和44年6月 法学部卒業
昭和58年12月 教授（法学部）
平成12年4月～平成14年3月
大学院法学政治学研究科長・
法学部長
平成15年8月 副学長
〔所属講座（研究部門）〕
政治思想史

〔専門分野〕

日本政治思想史

林 良博

担当：キャンパス・交通・安全・施設

(任期：平成16年4月～平成17年3月)



昭和44年3月 農学部卒業
昭和50年5月 大学院農学系研
究科博士課程単
位取得退学
平成2年6月 教授（農学部）
平成8年4月～平成11年3月
総合研究博物館長
平成11年4月～平成15年3月

大学院農学生命科学研究科長・農学部長

〔所属講座（研究部門）〕

国際動物生産学講座

〔専門分野〕

国際動物資源科学

藤井 敏嗣

担当：広報・評価・公開講座

(任期：平成16年4月～平成17年3月)



昭和45年3月 理学部卒業
昭和50年3月 大学院理学系研
究科博士課程修了
平成元年6月 教授（地震研
究所）
平成9年4月～平成13年3月
地震研究所長
〔所属講座（研究部門）〕

火山噴火予知研究推進センター

〔専門分野〕

マグマ学、実験岩石学

理事

池上 久雄

担当：卒業生との連携・同窓会等

(任期：平成16年4月～平成17年3月)



昭和40年 三菱商事入社後、パリ、
ニューヨーク駐在
平成3年 三菱商事(株) 参与・
職能担当役員補佐兼人
事厚生部長
平成10年 (社)日本貿易会常務理
事
平成12年 (社)日本貿易会常務理
事兼NPO法人国際社
会貢献センター理事長

上杉 道世

担当：事務組織・労務・法務・倫理

(任期：平成16年4月～平成17年3月)



平成11年7月 文部省主任行政
改革官
平成12年6月 科技厅長官官房
審議官
平成13年1月 内閣府大臣官房
審議官
平成15年8月 事務局長

監事

石黒 光

(任期：平成16年4月～平成17年3月)

平成15年7月 特定非営利活動法人言論NPO事務局長

平成16年1月 特定非営利活動法人言論NPO理事(非
常勤)

〃 総長室顧問

監事(非常勤)

佐藤 良二

(任期：平成16年4月～平成17年3月)

公認会計士、監査法人トーマツ東京地区業務執行社員

副学長の就任

平成16年4月1日付で副学長の就任がありました。以
下のとおりご紹介します。

副学長

古田 元夫

担当：教育・学生・留学生・入試

(任期：平成16年4月～平成17年3月)



昭和49年3月 教養学部卒業
昭和53年3月 大学院社会学研究
科博士課程中退
平成7年4月 教授(教養学部)
平成13年2月～平成15年2月
大学院総合文化研究科長・教
養学部長
〔所属講座(研究部門)〕

地域文化研究専攻多元世界解析大講座

〔専門分野〕

ベトナム研究

〔研究内容(代表的な著書や論文等)〕

「ベトナムの世界史」(東京大学出版会)

「ホー・チ・ミン」(岩波書店)

「アジアのナショナリズム」(山川出版社)

石川 正俊

担当：産学連携・知的財産

(任期：平成16年4月～平成17年3月)



昭和52年3月 工学部卒業
昭和54年3月 大学院工学系研究
科修士課程修了
平成11年4月 教授(大学院工
学系研究科)
平成13年4月 教授(大学院情報
理工学系研究科)
〔所属講座(研究部門)〕

認識行動情報学講座

〔専門分野〕

システム情報学

〔研究内容(代表的な著書や論文等)〕

センサ情報の並列処理、ロボット、ビジョンチップ、
光情報処理

副理事の就任

平成16年4月1日付で副理事の就任がありました。以下のとおりご紹介します。

副理事

竹原 敬二

担当：広報及び留学生の卒業・修了後の就職の援助等

平成13年4月 (株)リクルート常務執行役員

平成16年1月 東京大学総長室顧問(兼任)

石堂 正信

担当：財務の効率化全般

平成13年6月 (株)JR東日本企画取締役経理局長

平成15年12月 総長室顧問

副理事(非常勤)

片山 直久

担当：キャンパス・施設に関する諸業務

平成10年7月 興和不動産(株)常務取締役



平成15年度卒業式行われる

平成15年度卒業式が、3月26日(金)に、大講堂(安田講堂)において挙行された。式典に先立ち、総長、副学長、学部長及び学部代表教官等が、アカデミック・ガウンを着用し構内パレードを行った。式には、約3,212名の卒業生(卒業生数3,416名)とその父母など約2,751名(いずれも2回の合計)が出席した。

佐々木総長をはじめ、小宮山、桐野、渡辺副学長、当該学部の学部長、代表教官、事務局長、来賓の森山眞弓衆議院議員、北京大学許智宏学長が壇上に列席し、1回目の文系・教養学部は9時00分、2回目の理系学部は11時00分の開式となった。

また、父母控室である法文2号館31番教室、文学部3番大教室及び文学部1番大教室にはモニターを設置し、大講堂での式典の様相を放映した。

式は2回とも、まず、音楽部管弦楽団による、バッハ作曲の「管弦楽組曲第一番」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、小宮山副学長から学事報告が行われ、佐々木総長から、各学部卒業生代表に、順次、学位記が授与された。

続いて、佐々木総長から卒業生に約15分間にわたって告辞が述べられたのち、文系・教養学部は森山眞弓衆議院議員から、理系学部は北京大学許智宏学長(通訳:刈間文俊大学院総合文化研究科教授)からそれぞれ約20分間にわたり挨拶をいただいた後、最後に音楽部コーラアカデミーと出席者全員によるスコットランド民謡「蛍の光」の合唱をもって式を終了した。

なお、2回目の式終了後、14時00分まで卒業生及び父母などに、大講堂を開放した。



平成15年度卒業式

(総務部)

卒業式総長告辞

今日ここに卒業式を迎えられた法学部、文学部、経済学部、教養学部、教育学部、医学部、工学部、理学部、農学部、薬学部の皆さんに対し、東京大学を代表して心からお祝いを申し上げます。また、皆さんの勉学をこれまで支えてこられたご両親を初め、多くの方々にもお祝いの言葉を申し上げたいと思います。

今日は皆さんの人生において一つの大きな区切りを意味します。学生生活は楽しかったとか、試験に苦労したとか、いろいろ思い出があることでしょうか。しかしそれだけではなく、大きな区切りに際しては自ら省み、整理しておくべき事柄があります。第一に、皆さんそれぞれが如何に多くの人々の直接間接支援によって今日を迎えることが出来たか、改めて振り返ってみる必要があります。人生には偶然がつきものであり、どこまでが自らの努力の成果であり、どれだけ他の人々の助けを得て今日の自分があるのか、冷静にバランスシートを見極めることがこれからの人生の出発点として欠かせないものです。この見極めない人生は本人にとって学習効果が乏しいだけでなく、周囲の人間にとっても余り愉快ではないでしょう。

併せて、この四年余りの本学での学生生活がどのような変化を皆さんにもたらしたか、それをじっくり吟味するのも今日においては考えられません。この四年間、皆さんは外から強制されることなく、自らの可能性を試し、新しい可能性を発見することに取組んできました。その結果として何が皆さんの中に起こったのか、どのような変化の痕跡が残ったのか、これについて是非とも各自それぞれに総括していただきたい。これは大学で学んだ学科やそこでの知識、更には成績の善し悪しとは直接関係ない事柄ですが、それ以上に皆さんの人生にとって重要な意味を持つ出来事です。この総括作業の一つの手がかりは、東京大学において皆さんは「すごい人」「かなわない人」に出会ったかどうかにあると思います。そういう人に出会った人はこの四年間の総括の有力な手がかりを与えられたも同然です。そういう人に出会った経験を持たなかった人は貴重な時間を失ったのではないかと恐れるものです。

今日この場において私は皆さんそれぞれに整理し、総括すべき課題があるということ述べました。こうした整理や総括は自らの経験を大切に、それを生かして次の経験を積み重ねていくことの大切さへの自覚とつながっています。従来、卒業式というのはとかくこれまで勉強したことを忘れ、白紙で新たな世界に飛び込む区切りの儀式と考えられてきた側面がありました。しかし、多くの努力と経費を費やして経験したことを簡単に忘れ、次々にゼロからやり直しを試みる態度というのは精神的に不自然であり、反知性的な体質を持っています。自らの経験を知的に整理して「ストック化」することから思考と判断が始まるのですが、この「ストック化」を自ら

放棄し、あるいは拒否するところには思い付きと知的白紙状態しか期待できません。

かつて日本では大学を卒業して特定の組織に人生全体を預け、個人の能力の「ストック化」をほとんど犠牲にして生活の安定を得るといった社会的取引が一般的に行なわれてきました。そこでは組織だけが「ストック化」の対象であり、その受益者でした。しかし、この数年間の社会経済情勢の変化によりこうした取引はかつてほど存在感がなくなりました。現に、一つの組織に一生止まることを当然のように考える人々は少なくなり、皆さんの中にも次なる飛躍のための準備と機会を狙っている人が少なからずいるのではないかと想像しています。

現在、われわれが生きている社会は経済活動のグローバル化の波に日々洗われ、既存組織は激しい変貌を余儀なくされています。こうした中では個人が組織に距離感を持ち、独自の生き方を模索するのは当然といえます。同時に、最近におけるテロや軍事行動の頻発はある意味でグローバル化の一つの産物であり、それは新たな創造へよりもしばしば破壊の連鎖を呼び起こしかねない状況を生み出しております。それまでの強固な組織社会を破壊する動きには一定のプラス面がありますが、何時の間にか破壊のダイナミズムが自己増殖し、制御が難しくなることもまた忘れてならない人間社会の現実です。また、不気味に広がる病はグローバル化に対する警告のようにも見えます。経済的効率性を主たる旗印にしてきたグローバル化は数年前までの輝かしさを失い、その鬼子を生み出しつつあります。グローバル化は元々「安定」には無縁でしたが、今や、「安心」も「安全」も覚束なくなってきました。異常な広がりを見せる個人間での「テロ的」攻撃にしても、こうした状況と無関係ではありません。大きくなる自己破壊の歯車に身を委ねて生きていくのか、それとも新たなバランスの回復に向けて努力するのか、これは比較的近未来において人類が共通に直面する課題です。

今から二十年前、日本の政治の基本スローガンは「安全、安心、安定」でした。こうしたスローガンに満ちた社会は息苦しさを感じさせますが、こうしたスローガンが全く存在感がない社会もまた人間を不安にし、当然のことながら、一定の反動を生み出します。反動が起こること自身は自然的、本能的なものでありますが、問題はそれがどのような形をとることになるかということです。その結果、「安全」を求める志向が閉じこもり現象と新たな破壊と結びつき得ることはわれわれの身近に見られるところです。このパラドックスをどう切り抜けていくのか、20世紀の経験からしても学ぶべき素材には事欠きません。

皆さんにとってグローバル化は目標というよりも「与えられたもの」、所与であります。この「与えられた」状態の中で生きていかざるを得ないことは自明です。しかしながら、それがバラ色の世界に直結するのではなく、渦巻くような自己破壊のエネルギーを高めつつあるシステムでもあり、その政治的・社会的帰趨が不透明である

ことがすでに明らかになりつつある以上、この「与えられたもの」の次なる段階をどう展望するかがこれからのもっと大きな課題になるはずだ。

自らに配慮をしながらこの「与えられた」状態の中で生きていくことは一種の必然であり、自慢すべきことでもなければ卑下すべきことでもありません。問題は「その後」の事態にどう対面するかということです。かつての組織万能の時代は自分を組織に「丸投げ」し、自ら思考することの責任を負わないことが当たり前でした。しかし、そういう時代が終わり、皆さん自身も自らの経験と努力の「ストック化」を大事にし、それにこだわって生きていくことを決断した以上、「その後」について思考し、方向を探ることから免れることはできません。これこそ、皆さんが単に自らに配慮して生きるだけでなく、公共の事柄に配慮しつつ生きていかざるを得ないという事実なのです。公共の事柄への配慮というのはわれわれが生きていく上で必要とする基本的条件や環境について知的に取組むことに他ならず、その意味では自らに対する配慮と矛盾するどころか、むしろその不可欠な補完部分というべきものです。

東京大学はその東大憲章において「市民的エリート」の育成を目標に掲げています。その含意をここで尽くすことはできませんが、先に私が述べた公共の事柄への然るべき配慮はその核心をなすものであり、その最低限の条件であることは確かです。こうした配慮は社会のどの局面において生きていくにしろ不可欠な要素であり、その熟成に向けて継続的な努力を行なうことこそ、本学の卒業生に切望され、期待される点です。同時に、この公共の事柄への配慮に知的に取組むことが如何に簡単な事柄でないか、単純な事柄でないかを自覚し、主張することもまた皆さんの重要な課題であります。皆さんは自己への配慮だけで生きていくには有り余る能力の持ち主であります。このことを肝に銘じ、前途に横たわる世界規模の諸課題に本学で培った体験と知的刺激を武器にして堂々と立ち向かっていただきたい。そして大事なことは、そうした態度を若い時代からこれを習慣化することであり、功なり名を遂げてからやおら考え始める類のことではないことも忘れないでいただきたい。東京大学は将来にわたってそうした皆さんに対する知的支援組織として、今後とも皆さんと有意義な連携関係を形作っていきたいと考えています。

今日の卒業式に当たり、私は皆さんに対し、重い課題と大きな期待を表明しました。願わくば卒業生それぞれがこうした課題と期待を背に逞しく生き、何よりも悔いのない人生を送っていただきたい。その上、更に大きな幸運が皆さんを待ち受けていることを心から祈念し、私の告辞と致します。

平成十六（2004）年三月二十六日

東京大学総長
佐々木 毅

卒業式来賓挨拶

森山眞弓 衆議院議員



ただいまご紹介いただきました、森山眞弓でございます。

皆さま、ご卒業おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

皆さまは恐らく、小さな頃から一生懸命勉強をされる良い子であったと思われますし、周囲の期待も大変強く集まっていたのではないかと思います。そして、その精進が実って、今日、ここで東京大学の卒業をお迎えになった。ご本人はもちろんのこと、ご家族の皆さまもご満足のことと、心からお祝いを申し上げる次第でございます。

今、総長からご紹介ありましたように、私もずっと前、50年以上も前ですが、昭和25年にこの東京大学を卒業しました。ということは、当時は旧制でございましたので、大学は3年でございましたから、昭和22年からここで勉強をさせていただいた、というわけでございます。昭和22年というのは、歴史をちょっと思い出していただきますと、戦後になって1年半経った時でございました。大変世の中が混乱しておりまして、非常に不安定で、先がどうなるのか全くわからないという時代でございました。政治的には占領軍の占領下でございまして、国民は大変お腹の空いた、不安な日々を過ごしていたわけでございます。

ただ、私たちにとって嬉しかったことは、占領軍の方針が、男女平等ということ初めて詠ったことでして、昭和21年から参政権が女性にも認められましたし、男女共学の教育が受けられるということになりまして、昭和21年の入学試験から、東京大学も女性が受けることができるようになったのでございます。ただ私はその時は、専門学校で英語を勉強しておりましたので、世の中があまり英語を勉強していない時でありましたから、習い覚えた英語を使って、アルバイトをして、家計にも少しは役に立ちたいというささやかな望みを持っているだけで、東大を受験しようということは全く考えておりませんでした。昭和21年の秋頃でございました。

そうしましたら、私と同じように、専門学校の同級生でしたが、東大を受けるということを聞いたわけです。ある時、たまたまその人と隣同士に座りましたので、全くただの世間話のつもりで「あなたは東大を受けるんですって？」と言って話しかけたんです。そうしたらその人が「そうよ」と言ったので、「東大って難しいんでしょう？」と私が聞きました。「難しいわよ。だけど、易しいところもあるわよ」と彼女が申しました。彼女は英語を勉強した人ではありましたが、また他のことをやりたいと思って、東大の文学部へ進学するということを考えていた人でありました。当時はセンター試験というものはございませんから、各学部で違う試験をやった

のですが、文学部の入学試験というのは、英語だけではなくて、第二外国語というのがありました。だから、「試験が受けられてそれに受かるように第二外国語をちゃんと勉強をする必要があるけれど、急に今頃から始めてもだめだから。私は大分前から勉強していたから何とかかなと思うけれども、今から思いついても、文学部はだめよ」と言われました。そこで「じゃ、易しいって、どこ？」と聞くと、彼女は「法学部よ」と言ったんです。

私はそんなことも全然知らなかったの、そういうところもあるのか、ちょっと興味を持ちまして、調べました。そうしたら、確かに法学部はそんなややこしい試験もございませんで、択一式の、やや今の択一式とは違いますが、法律、経済学の基本的な知識を試すものと、作文と、語学がひとつだけだったんです。

「だから、英語は勉強していたから大丈夫でしょう。作文は、新聞などを読んでちょっと勉強すればできるんだから。択一式も、旧制高校の男の子たちが勉強していることを本を見ていけば、易しいんじゃない？」

なるほど、そういう手があるのか、と、それまで男性だけの牙城であったこの東京大学の、入学試験を受けるだけならば中に入れるだろうと思ひまして、『どんなところか見てやろう』と思ひましたものですから、一番易しいといわれる法学部を受けようと思ひました。まさか白紙で出すわけにはいきませんから、前の年に入った先輩に聞くということもしまして、急ぎよ、3か月ぐらいで試験勉強を始めたわけです。

ところが幸いにといひましようか、驚いたことにといひましようか、ヤマが当たりまして、合格してしまいました。その入学試験は大変大勢の受験者でして、戦争から帰ってきた復員軍人の方が圧倒的に多くて、古い軍服を着たまの受験生がたくさんおりました。その中で、女性は8人でした。私は幸いにも法学部入学者600人の中の、女性2人の1人として受かったわけでございます。

そんなわけで、私はそれまで全く興味も関心もなかった法律を勉強することになってしまいました。それはいいんですけども、物資が不足の時代でして、ノートも教科書もない。先生が講義なさることを一生懸命筆記して、優等生のノートをガリ版刷りプリントにしまして、それを学生の協同組合の売り場などで売っております。それが、唯一の拠り所であったのでございます。

世の中一般は大変なインフレでございまして、サラリーマンだった私の親は苦労いたしました。私も、それにいくらかでも足しになればと思ひまして、ちょうどやっていた極東軍事裁判の翻訳の仕事をアルバイトでしまして、通学したわけでございます。旧制ですから3年で卒業しましたけれども、世の中にはまだ経済が復興していませんでした。しかも、女が大学を卒業してくるなんて、誰も想像していない、考えてもいないので、女の人の就職先は全くないと言ってもよいほどでした。

唯一チャンスがあったのが、国家公務員試験でして、

それしか他に方法がなかったものですから、国家公務員試験を受けまして、ようやくそれに合格いたしました。初めての女性の大学卒業の国家公務員の幹部候補生として、それも最初でございましたし、当時の政府の中ではそういう人は、たったひとりだったのです。

そのようなわけで、私は国家公務員になりましたけれども、今申しましたように、初めてのただひとりですので、全然例がないわけです。前例がないということは、お役所では大変なハンディでありまして、それをなんとか切り開いていかななくてはならないという宿命が私の前にあったわけなのですが、私の後から、2年、3年おいて、本学の女子卒業生が1人2人と続いて公務員になりました。この後輩の方々が、大変元気のある方がいました。

「森山さんは最初の例なんだから、しっかり頑張ってもらわないと困る」と、私の後からハッパをかけてくれましたので、私も『困ったな』と思ひつつも何とか続けてきまして、結局30年間、公務員をやったわけです。

昭和55年から政界に転じまして、さっきお話がありましたように、環境庁長官、官房長官、文部大臣、そしてつい先日は法務大臣という仕事をやらせていただきました、既に政界23年になります。

しかし考えてみますと、私は偶然ではありますけれども、東大に受かって、ここで勉強させていただいたということが人生の大きな分かれ目だったと思うのでございます。もしもあの時、東大を受けていなければ、あるいは受かっていなければ、官界もないし、政界もなかったでございましょう。そのような意味で、私は東大に感謝している次第でございまして。

皆さんは、東大の卒業生になられまして、既に将来の方針も決まっていられる方も多いかと思います。また、『自分はとても優秀なんだから、大学はどこであったとしても、仮に東大に入らなかったとしても、今の自分は変わらないだろうし、これからも変わらないだろう。目的は公務員になるとか、司法試験を受けるということであって、何も東大を卒業したからといってそれが決まっているわけではないし、東大じゃなくてもよかったんだよ』、そう思っている方もいるかもしれません。また、自分の決めたこの道で順調に出世し、成長していくだろうと、自信を持って考えていらっしゃるのだろうと思います。それが当たり前だと考えている方も少なくないでしょう。このように自信を持って、将来に希望を持って、進んでいくということは大変素晴らしいことですが、しかし、人生は長いのでございます。これから半世紀以上も皆さま方は、世の中の重要な人材として、いろいろなところで活躍していただかなくてはなりません。長い間には、何があるかわかりません。21世紀になってから、本当に思いがけないことが次々と起こりまして、私たちが将来何が来るか、ということを正確には言い切れません。激動しつつあるこの世の中で、しっかりと生き抜いていくということが、皆さまの宿命として与えられているわけでございます。

そのような時に、恐らく、優れた友人を持ったこと、そして立派な先生にお会いできたこと、この東大に学んだことに感謝することが、きっとあるに違いないと思います。どんな立場になっても、どのような時にも、東京大学の卒業生であるということを誇りとして、誠実に生きていただきたいと思います。

「noblesse oblige」という言葉をご存じかと思います。これはフランス語か何か元であるらしく、「生まれながらに身分の高い者というのは、それなりに義務と責任がある」ということを意味していると思いますが、日本でいうところの「武士たるものは恥じることなく生きていこう」という気持ちに似たところがあるかと思います。「ラスト・サムライ」という映画が最近評判で、我々にも久しぶりに武士道というものを思い出させてもらいました。現在の日本には「noblesse oblige」という言葉が生まれたフランスのように貴族はおりませんし、侍も今はありません。しかしるとすれば、幸運に恵まれて、能力と機会を得た人々、そのような人々のことを言っているのではないかと？ そう読み替えることもできるのではないかと思います。運の良い能力とチャンスに恵まれた人々ということになりますと、多額の国費を注ぎ込んだこの東京大学で思う存分に勉強し、友だちを得、先生にお会いしてご指導をいただいた皆さんこそ、東大卒業生という肩書きを持った方々こそ、その人々ではないのでしょうか。

どうぞ大変恵まれた、東京大学卒業生、その義務と責任ということを深く肝に銘じていただいて、社会の指導者として大いに活躍されますように、そして皆さまの前途に幸多きことを、心よりお祈りする次第でございます。誠におめでとうございました。

卒業式来賓挨拶

許智宏 北京大学学長

尊敬する佐々木毅総長
諸先生方
親愛なる学生の皆さん



本年度の東京大学卒業式にお招きいただき、出席することは、私の喜びとするところです。同じアジアの大学の学長として、この日このとき、私は皆さんと同じように、言葉に表せない喜びと感動が胸に溢れています。なぜなら、東アジアの希望を託す若い世代が、今まさに人生の最も重要な一歩を踏み出そうとしているからです。

ここに私は、本日の卒業式に参加している私の同僚と、北京大学並びに北京大学の全ての教官学生を代表して、皆さんに心からの祝福を送ります。皆さんは、4年間の刻苦奮闘により学業を終えられ、母校とご父兄、そして自分自身に対して、立派な答案を提出されたのです。これは、皆さんの人生における一つの記念碑であり、また新たな出発点でもあります。皆さんは、ここを起点に、さらに大きな成功を勝ち取られることでしょう。

私は東京大学に対しても祝福を送ります。貴校は、人材の育成という事業で、また輝かしい成果を上げられました。私は諸先生方にも、心からの敬意を表します。諸先生方の弛まない指導が、今日の若き門人達の成果を生み出したのです。従って、本日は卒業される方々の祝日であり、教える者の祝日でもあります。すべての卒業生は、母校と恩師の恩情をいつまでも胸に刻みつけることでしょう。

4年前、皆さんは貴国の最も優れた学生として、同世代の中から才能を見出され、未来への希望を胸に、美しい赤門をくぐられました。そして、この地で、大学の芳しい雰囲気の中、学術の先達の教えに耳を傾け、教室で学び、実験室で研鑽に励み、図書館で書物の海を満喫されました。皆さんは、もっとも貴重な青春の日々を、この地で送り、忘れがたい人生の記憶を残されたことでしょう。皆さんは、科学と文化の知識を懸命に学び、崇高な道徳的人格を鍛えようとされました。東京大学の悠久にして偉大な伝統は、皆さんに受け継がれ、発揮されたのです。本日の卒業式は、皆さんが手にされた4年間の成果を、東京大学が厳かに顕彰する場であるとも言えます。

皆さんは、理系の学生です。皆さんは、新旧の世紀が交代する歴史の大きな流れの中で生を受け、成長し、21世紀の冒頭にキャンパスから社会に育っていかれます。いま、科学技術は日進月歩の進歩を遂げています。情報技術はさまざまな学問分野に応用され、人類の社会と生活の姿を一変させています。生命科学とその技術は、生命の本質に対する認識をさらに深め、医学と農業の状況を大きく変えました。新しい素材の誕生やナノ・テクノ

ロジー、環境科学とその技術は、人類の社会と経済の発展に、根本的な影響を与えています。科学技術は、現在の生産力のもっとも活力ある要素となっています。現在、人類が直面しているさまざまな問題、人口と疾病、食料の供給、環境などの解決は、すべて科学技術と深く関係しています。皆さんの目の前には、これらの課題に挑戦し、腕を振るう機会に満ち溢れた世紀が開けています。そして、皆さんには、より大きな社会的責任が、その肩にかかろうとしてもいるのです。

今日、皆さんの卒業式に列席し、私も自分の大学生生活を思い起こしています。私も理系の学生でした。1959年に北京大学の生物学系に入学し、当時は6年間だった学部生活を過ごしてから、1964年に卒業し、中国科学院の大学院生となりました。その頃の中国は、物質的な生活はかなり貧しかったのですが、充実した勉学の日々は、生涯忘れることのない学生時代の大切な記憶となっています。北京大学で学んだ経験が、私に科学研究に携わり、国家に報いるという人生の目標を与え、私の学問研究の基礎となり、研究に臨む厳格な姿勢を育ててくれました。母校から与えられた知識と精神的な財産は、私に多くのものをもたらしてくれました。ですから、この特別な日に当たって、私は皆さんの先輩として、この貴重な歴史的な機会を、大切にしてほしいと希望します。前途有為な若人は、その鴻（おおとり）の志を広げ、自らの学んだものを社会に還元し、より広い天地の中で、理想を胸に、希望を実現させ、自らの生きる価値を示し、輝かしい未来を作り上げてほしいのです。

世界中の学者や政治家の多くが、21世紀は東アジアが飛躍的に発展する世紀だと考えています。グローバリゼーションを背景に、東アジアの地域協力はいま大きく前進しています。そして、中国と日本は大事な使命を担っているのです。私たち二つの国は、交流と協力をさらに深め、若い世代に相互理解の機会を提供し、ともに手を携えて、東アジア地域の平和と繁栄に貢献していかなければなりません。

中国と日本は、二千年の友好往来の歴史をもつ隣国です。我々両国は、地理的に近いだけでなく、文化的にも深いつながりがあります。中日関係の歴史には、痛ましい教訓があり、また政治と経済の体制も異なります。しかし、私は、両国人民が友好的につきあい、東アジアがともに発展し、繁栄していくことを、妨げるものではないと、固く信じています。

北京大学の教授で、著名な哲学者であられた馮友蘭先生が、1945年に書かれた文章に、次の一節があります。「同は異を妨げず、異は同を害せず、五色交わり輝き、相い得ること益々彰か。八音は合い奏し、終には和して平らかとなる」(共にいても異なる者を排除せず、異なる側も皆に害をなさず、五色の光が交わり輝きを増すように、互いの得る利益はますます顕著となり、八つの音色が合奏するように、ついには和音となって平穏が訪れる)。中国と日本もまさに「相い得ること益々彰か」にして、「終には和して平らか」となるべきなのです。両

国の人民は、いま以上に仲良く共存していくべきなのです。

科学技術の協力と学術交流を深めることで、大学は、異なる国どうしの理解と協力を増進するという、その独自の役割を果たすことができます。喜ばしいことに、北京大学と東京大学の間には、長年にわたって良好な協力関係が築かれてきました。私は、中国と日本の末永い友好協力関係を作り上げる上で、私たち両大学がともに貢献したいと願っています。

新しい、より友好的な中日関係を作り上げるのは、皆さんたち若い世代にかかっています。東アジアの平和と繁栄をともに担っていくのは、皆さんの果たすべき責任でもあります。皆さんがあらゆる智恵と勇気を出し合い、この偉大な使命を果たされるよう願っています。

東京大学が世の人々から尊敬されてきたのは、百年以上の歴史の中で、東京大学があなた方の国家と人類社会全体に対して、比類ない大きな貢献をしてこられたからです。皆さんは、世の人々から、東京大学の姿を代表するものと見られることでしょうか。どうか、自らの名誉を惜しみ、母校の名誉を惜しんでいただきたい。皆さんは、その素晴らしい成果と高尚な人格によって、母校の誇りとなっていたいただきたい。そうすれば、皆さんはあらゆる教育に携わる者の誇りとなり、人類の誇りとなるであります。

最後に、私は皆さんの輝かしい前途を再度祝福したいと思います。そして、東京大学がますます発展され、北京大学と東京大学の協力がさらに発展し、両大学の教官学生の友情が、永久（とわ）のものとなりますよう祈念して、お祝いの言葉といたします。

ありがとうございました。

平成15年度学位記授与式行われる

平成15年度学位記授与式が、3月25日（木）に、大講堂（安田講堂）において挙行された。式典に先立ち、総長、副学長、研究科長及び研究所長等がアカデミックガウンを着用し構内パレードを行った。

式には、約2,271名の修了生（修了生数3,818名（修士課程2,711名、博士課程1,107名））とその父母など約1,775名が出席した。

本年の授与式も、修士課程と博士課程ごとの2回に分けて行われ、修士課程学位記授与式は、昨年度と同様に、父母控室である法文2号館31番教室及び文学部3番大教室及び文学部1番大教室に、モニターを設置し、大講堂での式典の様相を放映した。また、博士課程学位記授与式は、父母等も大講堂に入場して行われた。

佐々木総長をはじめ、桐野、渡辺副学長、各研究科長、各研究所長、事務局長、来賓の森巨元総長、有馬朗人元総長が壇上に着席し、1回目（修士課程）は9時00分、2回目（博士課程）は11時00分に開式となった。

式は、まず、音楽部管弦楽団による、バッハ作曲の「管弦楽組曲第一番」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、桐野副学長、渡辺副学長から学事報告が行われ、佐々木総長から各研究科の修了生代表に、順次、学位記が授与された。

続いて、佐々木総長から修了者に約10分間にわたって告辞が述べられ、修士課程は、森巨元総長から、博士課程は、有馬朗人元総長からそれぞれ約20分間にわたり挨拶をいただいた後、最後に音楽部管弦楽団による「蛍の光」の演奏をもって式を終了した。

（総務部）

学位記授与式総長告辞（修士課程）

今日ここに修士課程を終えられ、学位記授与式に臨まれた皆さんに対し、東京大学を代表して心からお祝いを述べたいと思います。併せて、これまで皆さんの勉学を支えてくれたご家族を初め、多くの方々のご支援に対し、深甚なる敬意を表する次第です。特に、外国から本学に来られ、幾多の困難を乗り越えられて今日の記念すべき日を迎えられた留学生の皆さんに対しては、一層大きな拍手を送りたいと思います。

皆さんの中には直ぐに社会に出て活動を始める人もいますし、これから博士課程で更にその研究に磨きをかける人もいます。あるいは、祖国に帰って働くことにした人もいます。いずれにせよ、皆さんの前途には輝かしい未来があることと確信していますが、こうした未来を手に入れるためにはこれまで以上に粘り強い努力と、果敢な挑戦が求められることは言うまでもありません。修士課程において培った自らの実力に自信を持ち、着実に新しい可能性を切り開くべく、そ

れぞれに勇往邁進されることを祈ってやみません。

この新たな旅立ちの記念すべき日に際し、私は皆さんの前に一つの共通の課題を提起したいと思います。皆さんは修士課程においてそれぞれに専門的知識に接し、少なくともそのある部分については相当の自信をもって語れる状態にあるだろうと想像しています。そうした専門的知識があなた方にとって大切なものであり、あなた方の存在そのものに匹敵する重い意味を持っていることを私は認めます。しかし同時に、われわれが社会で生活していく存在である限り、こうした知識が他の人間にとってどのようなものであり、どのような意味を持っているかについて一切問わないままに過ごすことはできません。幸いなことにこうした他からの問いかけはその性格上甚だ曖昧模糊としており、多くの場合、切り抜けることはそう難しくありません。しかし、一定の時間の幅をとってみると、この問いかけはじわじわとあらゆる知識を取り囲み、執拗にそれなりの回答を求めているように見えることも否定できない事実です。

皆さんがこの数年を過ごしてきた大学は常に新しい知識の発見と開拓そのものを目的とした極めて特異な社会集団です。大学ではそうした知識の社会的意味を問うことは禁じられているわけでないにしろ、それを直接問わないことが広く容認された組織であることは間違いのない事実です。それが大学という組織の大きな特徴であり、ましてや、そうした知識が俗な意味で「役に立つ」ことが求められることのないような組織です。このような大学という組織の活動の成果が何の役にも立たないというわけではありませんが、究極的にはいつ、どのように役に立つかを企画したり、予告したりすることは敢えて宣言しない組織なのです。逆に言えば、こうした企画などを企てることは人間が自由に思考し、自由に探求する存在であることを軽視する、甚だ傲慢な企てと言っても過言ではありません。大学が大学である以上、この点についての譲歩の余地はあり得ません。大学はその意味で自由人からなる世界です。

しかし他面において、個々の専門的・先端的知識についていえばその意味についての問いかけは遂に止むことがないと考えられます。これに対して、自分はこの種の知識そのものの探求に興味があり、その意味について考えることには興味がないと回答することは大学という組織の中では通用するかも知れませんが、社会的に通用するかは大いに疑問です。実際、この問題との取り組みを避ければ避けるほど、社会の側からの問いかけはますます執拗なものになるかも知れません。結論的にいえば、専門的・先端的知識の探求とは異なるこれら知識の意味についての問いかけに対しては、大学院で学んだ経験のある者は正面から取組む責務があると考えます。更には、それは決して消極的な、無駄な知的作業としてではなく、積極的意味のあるものとして立ち向かうべきです。

その最大の理由は、社会と知識との関係は問題적であり得るといふ根本的事実にあります。知識には実にさま

ざまなものがあり、その機能もまた一概には論じられません。しかし大別すれば、社会が自らの必要のために知識を再生産していくという側面と、知識が社会を変えていくという側面とが交じり合っていることは誰も認識するところです。知識は社会の反映的「産物」である側面があると同時に、社会の中で誕生する新しい知識、先端的知識が社会の目の前の現実と衝突し、やがては知的世界の変革から社会そのものの変化の引き金になることはもう一つの側面でした。特にこの二世紀余り、この後者の様相はますます強くなり、伝統に根差した静態的な社会的現実について語ることはますます難しくなってきました。政治学的に言えば、知識の持つ社会的権力機能は今やわれわれの周囲の最も特徴的な現象となりました。大学院の隆盛はこのことと深く結びついています。

このような事情を念頭に置くとき、専門的・先端的知識の意味についての社会の側からの問いかけには尤もな理由があることが理解できると思います。従って、自分はこうした知識そのものの探求には興味があるが、その意味について考えることには興味がないと回答することは、単に社会的に慎ましい態度の表明であるのみならず、知識の持つ権力機能に目をつむり、隠蔽する由々しい態度であるということにもなりかねません。自らの関わる専門的・先端的知識の意味について真摯に考え、必要に応じてその説明を試みることは、先にも述べたように皆さんの重要な責務であります。

ここで留意しておきたいのは、知識の意味を問うことはそれ自身非常に高度な知的・哲学的作業であるということです。これに安易に取組みますと、とかく眼前の「役に立つ」かどうかといった話に足をとられかねません。俗な意味で「役に立つ」話に身を委ねることによって自らを不当に貶めるようなことにならないよう、くれぐれも注意が必要です。知識の意味を問うに際しては皆さんの人間としての矜持にふさわしい取り組みが必要です。この高度な知的・哲学的作業を避けるのではなく、むしろ、そこに新しい知的刺激を見出すような態度こそ、皆さんに本当にふさわしいものであると信じます。こうした形で知識と人間との関係を捉え直すことは、知識と社会との新たな関係を継続的に模索する道でもあります。

皆さんには今後ますます専門的・先端的知識の探求を続けられるとともに、併せて、自らの関わっている知識の意味を勇気をもって説明する心がけと意欲を持っていただきたい。こうした心がけと意欲があつてこそ、皆さんそれぞれの社会的発信力は格段に高まるだけでなく、知識の持つ社会的影響力全体が高まり、人類に新しいよりよい可能性が切り開かれることと信じています。今日の記念すべき機会を契機に、皆さんがそれぞれの場においてこうした課題に真摯に取組まれ、更に新しい知的地平を切り開かれることを心から切望する次第であります。東京大学はそうした皆さんを誇りにし、将来にわたって皆さんと連携して人類の新しい可能性を探求する組織として確固たる地位を占めていく決意しております。

最後に、皆さん一人一人の将来が幸運に恵まれ、それぞれに悔いのない人生を送られるよう、そして、東京大学で過ごした年月が皆さんにとって忘れがたい経験であったことを祈念して、私の告辞と致します。

平成十六（2004）年三月二十五日

東京大学総長
佐々木 毅

学位記授与式総長告辞（博士課程）

博士号を取得し、本日この式場に出席されている皆さんに対し、先ずは心からのお祝いを申し上げます。おめでとうございます。博士号の取得は学歴の頂点を極めることであり、皆さんの研鑽の道は長く、しかも厳しいものであったと思います。それを乗り越えることができたのは何よりも皆さんそれぞれの学問に対する真摯な態度の賜物ですが、そうした長きにわたる厳しい勉学と研究を支えてくれたご家族や支援者の方々に対しても、皆さんとともに感謝の気持ちを表したいと存じます。

特に、外国から東京大学に学び、博士号を取得された方々については、その堅忍不拔の努力と真摯な研鑽に対し、一層の祝意と敬意を表明したいと存じます。

東京大学がいわゆる大学院重点化を始めてから十年余りが経ちますが、高度な専門的・先端的知識に対する社会の関心は急速に高まってきました。この背景にはグローバルな規模で進む知識基盤社会化現象があり、日本社会もこの潮流から孤立しているわけにはいかないという、大きな事情があります。博士号を取得された皆さんは正にこのような知識基盤社会化現象の申し子であるとともに、その先頭に立つべき人材として期待されているわけです。皆さんの活躍すべき舞台はそれこそグローバルであり、研究重点型として、アジアにおいては勿論のこと、世界的にも名声のある本学で培った実力を遺憾なく発揮して輝かしい前途を切り開いていただきたい。このことを何よりも切望して止みません。

ところで学歴の頂点に立つに至った皆さんの目にはどのような知的世界が広がっているのでしょうか。皆さんがそれぞれの専門領域において世界最高水準の域に達していることは疑う人はありません。同時に、こうした域に達するためには気の遠くなるような知的操作と準備が必要であり、平たく言えば、日常性から一定程度離脱することが不可避的に伴います。世間が大学を称して「象牙の塔」と命名したのにはそれなりの根拠があります。自らの内に「象牙の塔」を持つことなく、博士号を取得できるというのは私には信じられない事態です。これは誰にでもできることではない生き方であり、それ故に社会的にも評価され、一目を置かれることになります。これまで皆さんは内なる「象牙の塔」を丹念に磨き上げ、その専門性、先端性を徹底して追い求めて来ましたし、

それこそが最大の関心事でした。

私の先ほどの問いかけは、狭いながらも頂上に達した皆さんはこれから何を考え、何をしようとするのかということに関わります。容易に想像される回答は、研究を更に磨き、新たな山の頂点に向かって登頂を開始するというものでしょう。確かに、誰もそうした回答の妥当性を否定しませんし、誰もそれを間違いだという人はいないでしょう。そこからどのような新しい成果が出てくるか、興味津々で見守ることになります。他の人間は「頑張ってください」と言うしかないでしょう。

しかしながら、皆さんの中には学歴の頂上に立つに及んで自分が行ってきたことは何であったのか、どのような意味があるのかなどと、改めて思考を巡らす人もいることでしょう。これが先の私の問いに対する第二の回答です。これはこの記念すべき区切りにおいて自らの知的営為の足場を吟味し、将来の営為の方向性を探るという意味において、十分に理解できる回答です。何事もそうですが、自らの行なっていることを自らの行為そのものによって基礎付けることができない以上、一旦、自らの行為の外に出てそれを外から観てみるというのは正常な知的態度であります。

この二つの回答を比べますと、第一の回答はこれまでの知的探求の連続線上に新たな高い頂上に向かって一目散に駆け上がる態度でありますし、第二の回答はその前に自らの学問研究の位置と意味について一度考えてみよう、今がその良いチャンスであるという、いわば「ため」を作ろうとするものです。前者はいわば上ばかりを向いて横や下をみようとししないものであり、後者は横や下から自らを覗いてみようというものです。ここまで言えばお分かりのように、この一方だけで十分であるわけではなく、この二つを適宜結び付けていくことが今後とも皆さんにとって必要であるというのが、私が述べたい点であります。つまり、ここで専門的・先端的知識の探求を中止することは論外であります。しかしながら、自らの知的活動の意味を外側から観察し、外部からの問いかけに答えるそれなりの用意もまた欠かせません。

大学という組織は専門的・先端的知識の探求そのものが是とされる、珍しい独特な社会組織です。そうした探求の意味をとやかくうるさく問い掛けることよりも、この探求そのものをプラスと評価し、それを更に高め合う組織です。第一の回答はその面を素朴に再生産したものと云えましょう。ところが大学以外の組織はこうしたことには総じて関心がなく、個々の知的探求の意味や更にはその効用にばかり関心を向けることは否定できない事実です。そこでは「象牙の塔」という言葉が専らマイナスの意味に用いられるのはその典型的な例です。しかし、人間である限りにおいて自ら行なうこと、行なおうとしていることについてその意味を問うというのは避けられない事態であり、極めて人間的な事態です。そのことは多くの古今東西の哲学的な問いかけに共通に見られる点であり、何も目の前の俗な議論だけに見られる事態ではありません。第二の回答はそうした事態を本能的に感じ

取った上での反応といえましょう。

この二つの回答を適宜結び付け、専門的・先端的知識の深化に邁進するだけではなく、自らの知のあり方や意味についてどう答えるかを考えることは、博士号を手にした皆さんの責務であると思います。実際、卓越した専門的知識の持ち主が自らの知的作業について粗暴な意味付けしか与えず、平然としているといった事態は決して珍しくありません。専門的知識をめぐる競争が極めて熾烈なものであることをわれわれはよく知っています。しかし同時に忘れてならないのは、こうした知識の意味についての争いもまた極めて熾烈であり、遂に論争的であることを止めることがないという点です。それは簡単に回答が「見つけれられる」とか「ある」という領域ではありません。それは極論すれば、政治的論争・闘争に近い体質を備えています。従って、知識の意味付けの世界に踏み込む際には確固たる信念を持つことは一つの対策ですが、ナイーブであることは狼の群れの中で小羊で居ようとするようなもので何ら有効な策ではありません。その意味でこの問題を安易、あるいは受け身的に考えることなく、それ相応の知的準備をすることが博士号取得者には期待されて然るべきです。それこそ、社会において専門的・先端的知識が正当な地位と存在感を示す王道です。

今日を境に皆さんにはこの問いかけが押し寄せてくることとなります。俗な意味で「役に立つ」などと安易な回答をすると直ぐに「役に立たなくなる」危険があります。それにどう賢明に答えるか、皆さんの闘いとその成果を楽しみにしております。皆さんには是非とも広い視野に立った意味付けを背中に背負いながら闘っていただきたいと思います。そしてその闘いに疲れたら、再び東京大学に帰ってきてエネルギーを補給してください。東京大学は何時までも皆さんにとってのエネルギー源でありたいと願っています。

最後に、皆さん一人一人が幸運に恵まれ、それぞれに悔いのない人生を送られるよう心から祈念し、そして、東京大学で過ごされた月日が皆さんにとって忘れがたい、実り多いものであったことを祈念して、私の告辞と致します。

平成十六（2004）年三月二十五日

東京大学総長
佐々木 毅

学位記授与式（修士課程）来賓挨拶

森 亘 元東京大学総長



ただいまご紹介いただきました森でございます。本日の式典は東京大学・修士課程修了の学位記授与式と理解しておりますが、このような晴れがましい場にお招き下さり、挨拶させていただくのは、私にとって大変光栄なことでございます。

私は、もう15年以上も前に、この大学で総長を務めておりました。いわば年寄りでございます。人間、この年になりましても、人前でお話できることといえば、結局は自分自身が味わった経験とか、あるいは自分がよく知っている身の回りの事柄にすぎないと、最近、痛感しております。そこでまず、多少、経験のお話から始めましょう。

私の現役当時、国立大学の学長にとって、監督官庁とさまざまな意味で意見を違えることが始終ございました。特に東京大学の総長としては、このように監督官庁との間で、決して諍いではありませんが、意見を異にする場合があるのは、一つの意味の宿命ですらあったような印象を今でも抱いております。

もし私の記憶に誤りがなければ、大学院の問題に関しても、少なくとも2つ、大きな相違点があったと思います。そのうちのひとつは、学生諸君の身分についてであります。端的に申せば、全面的に学生であるのか、多少とも研究者であるのか、ということです。当時の文部省の見解は、大学というところには給料をもらっている教官、研究者、事務職員と、それから授業料を払っている学生の2群しかない。従って、大学院学生ともいっても100%学生である、とするものでした。ある意味では当然の考えでありましたが、他方、私たちとしては、それを充分認めながらも、大学院学生には他方、研究者といった実態もあるので、そういった一面にもどうか光を当てて、応分の敬意を払っていただきたい、対応をして欲しい、そのようなことを申しておりました。私の時代にははっきりとした解決も得られませんでした。さて現在、どのような見解を両者がもたれ、事を進めておられるのか、よくは存じません。

もうひとつは、大学院の目的でございます。私が大学におりました当時、大学院というものは博士課程、修士課程を通じて、研究者養成のために存在するという、そのような趣旨が、私の記憶が正しければ、規則にも書かれていたと思います。しかし私たちは、大学院学生諸君の将来の姿として当然、研究者になる方も多いわけですが、高度の専門性をもった職業人になる人たちも少なくない実情を踏まえ、「高度に専門性を持った職業人を養成する」という点も、目的の中に加えていただきたいと申しました。これについては比較的簡単に合意が成立し

て、恐らく規則の中にも、少なくとも修士課程に関しては、そのような趣旨が明記されて今日に及んでいると思います。このようにして、私たちの時代にも、いろいろな経緯がございましたが、とにかく今日、こうして皆様方は本学の修士課程を無事修了され、それぞれが身につけた一つの専門性が認められ、学位を与えられたのです。これは尊敬に値する、大変めでたいことで、心からお祝いを申し上げる次第でございます。

さて、ではこのあたりで、次に私の身の回りのことを少し、お話しいたしましょう。私はもともと医学部出身で、従って身の回りのことと申しますと、つい医学、医療といった話になってしまいます。私たち、医師の世界では、専門性を養うための教育として、大学院教育のほかにもうひとつ、専門医教育という道筋がございます。今日、この場は修士課程修了の式典ということもあって、医学関係の方は必ずしも多くないと存じますが、あえて、このような、専門医についての話をさせていただきます。

私たちは医科大学を卒業して、国家試験に合格しますと、医師という一つの専門性を与えられます。しかしこのように医療・医学が発達した今日では、医師という専門性だけでは足りない部分が多く、そこで医師の中で、さらに、例えば内科医、外科医という専門に分かれます。それでもまだ足りないということで、ずいぶん前から、例えば内科の中でも消化器病を専門とする医師、循環器病を専門とする医師、というように、だんだんに細くなっていきます。ところが、それでもまだ足りない。消化器病を専門とする医師の中でも、胃腸、いわば管のような臓器を専門に扱う人たち、肝臓のようなどっしりとした固まりを扱う人たち、などなどと分かれていくのです。しかし、実際には更にその先がございまして、胃腸の管を取り扱う医師の中にも、その中に小さな鏡を入れて観察し、あるいは治療を施すような技術を専門とする人たちも生まれてくるわけでございます。

従って、こと医療の世界に関する限りは、このように専門というものがどんどん増え、更に更に細くなっていく。これが実際の姿です。いわば、医師という大きな幹があって、そこから内科という太い枝が出て、それから更に消化器という小さな枝に分れ、その先には、たとえば小さな鏡を使う内視鏡診断といった細い細い枝が生まれる。そして実際には、太いと思っている幹の基本に、人間という根っこがあるわけでございます。人間という根っこから医師という幹が伸び、内科という太い枝、消化器病という小さな枝が出る。さらには内視鏡技術という細い枝もある。くり返しになりましたが、こうした構図が現実存在しております。では、このような中で、実際の医療ににどのようなことが起こっているか、それが問題です。

この時代、医療というものは、好むと好まざるに関わらず、科学あるいは科学技術に負うところが多い、これは皆様、よくご承知のことと思います。そのような中であって、専門性、特に抹消の、あるいは末端の専門性

がだんだんと重きを成し、世の中から注目され、そして実際に医療の現場でも大きな活躍をしております。何か、細い枝こそがもてはやされ、ましてやその先に立派な果実でも実ろうものなら、みんなその果実にばかり注目し、重宝がられ、賞讃を受け、そしてたしかに、実際にたいへん役に立っているのも事実でございます。ただ、それに伴って起こる恐ろしいことは、だんだんに根幹の方が、細い枝が、太い枝が、幹が、そういったものが次第に忘れられていく、あるいはないがしろにされていくのも事実でございます。やや極端な言い方をすれば、一番末端の専門性に携わっている人たちは、時には医師でない、お医者さんではない、非常に高度な専門性を持った技術者であると感じる場面も、実際に存在するのです。そのような人たちは、最新式の技術を使って目の前にある瘤を、あるいはそこに起こっている出血を、どのように処理するかにもっぱら気を取られる。そのために平素の考えとしても、つい自分が消化器病専門の医師であることを忘れ、更には、身体全体を診なくてはならない内科医であるという視点が、つい疎かになり、ましてや最大の根幹である根っこ、自分も患者も共に人間であるといったことには、思いを致すことがだんだんと希薄にさえなってくる。これが、現在の医療がかかえ、悩んでいる事柄の一面であるように、私には感じられます。そして、このような姿勢が、現在頻発している医療現場における事故の原因のひとつにつながっているのではないかとさえ思うのでございます。

ただ、このような専門医、非常に細かい細かい仕事を専門にしている医師にも、それなりの言い分がありますし、また私たちとして充分、同情というと語弊がありますが、配慮してあげなければならない面があるのも確かでございます。今日のように、医療を取り巻く科学、科学技術の進歩発達が、激しくしかも急速な時代には、医師とても時には科学者、あるいは技術者に徹するという程の気構えなり、あるいは心構えをもって対処しない限り、とても最新の知識を吸収することはできない。とても最新の技術を身につけることはできない。ましてや研究面ともなれば、他との競争に打ち勝つことはできない。新しい考え、方法を開発することはできない。そうした一面があるのもまた事実なのです。

このような点について、恐らく、大学病院、大学の医学研究所などでは、多くの医師が心の中に矛盾を抱え、悩みを持っていることも少なくないと感じております。

そこで、私が若い人たちに申しております注文は、言うは易く行は大変難しいことですが、専門家として職業につき、あるいは研究を進めていくときには、どうか専門性を十分に発揮すると同時に、専門性のひとつ手前にある、何といいますか、一般性とでも申しますか、不変性と申しますか、そういう基本も忘れずにいていただきたい。内視鏡を使って細かい、難しい手術をする際にも、常に医師であることを忘れないで欲しい。このような2つの考え、態度を両立させることは、くどいようですがありますが、実際には難しいことかもしれません。しか

し、心掛けとしては、どうかそのようなバランスに注意していただきたいということ、平素、若者たちに申し上げている次第でございます。

このような医学、医療の世界での事柄が、どれだけ社会一般に通じる面をもっているか、私自身、自信のあることではありません。けれども、少なくとも若干の共通面はあるのではないかと感じております。私はこのようなおめでたい日に、ひとつの専門性を認められ、ひとつの学位記を授与された皆様のお一人一人に水を差すような気持ちは、毛頭ございません。むしろ、心からお祝い申し上げ、皆様それぞれが獲得された、忝に認められた専門性なるものに対して、心から表意を啓するものでございます。ただ、できることであれば、将来そうした専門性を発揮される際には、どうか同時に、それ以前、その基本に横たわっている、言葉は適切であるか否かわかりませんが、一般性とか普遍性、あるいは教養ということかもしれません、それらにも常に思いを致していただきたい。そして、そのような基礎がしっかりしていればこそ、皆様方の専門性が生かされ、立派な専門家として、これから活躍されるものであると信じております。

このように、自分が関係している専門の領域のことばかり申し上げましたが、お許し下さい。どうか皆様方、これから豊かな専門性を大いに発揮され、ご自身も納得されるような、それからまた、総長も言われましたごとく、世の中の役にも立つような人になっていただきたい。これが私からのお願いであり、ご挨拶でございます。どうも失礼いたしました。

学位授与式（博士課程）来賓挨拶

有馬 朗人 元東京大学総長

皆さん本当におめでとうございます。今日この栄えある学位記授与式に御招待いただき皆さんにお話しする光栄を与えて下さった佐々木総長を初めとする東京大学の方々に心よりお礼を申し上げます。



永年の蛍雪の功と研究の功あって、本日博士号をお受けになられた皆さんに心よりお喜び申し上げます。皆さんのお喜びは当然であります。御両親をはじめ御親族の方々のお喜びも、さぞかし大きいものと推察しております。特に海外より東大へ留学された方々の努力に心より賛辞を呈します。皆様本当におめでとうございます。

先ず皆さんが大きな研究をして人類の英智を深め発展させ、人間社会のため大きな貢献をしてやろうという、志と気迫を持っていただきたいのです。

ここでなぜ研究するか、研究とは何かなどを皆さんと一緒に考えてみたいと思います。なぜ研究するのでしょうか。一人一人違った答えをお持ちでしょう。でも多くの人が面白いからと考えておられるのではないのでしょうか。自発的に進めてゆく研究は面白く、楽しいから進めるのだと思います。仮に外部から与えられた問題の研究でも、問題を解いていくことが面白いし、特に解決できたときの喜びは大きいものです。でも研究は楽しいだけではありません。うまくいかない場合があります。否その方が多いでしょう。そのときどうするか。さらに努力を続けるのも一つの決断です。考え方を変えてみる、いわゆる発想の転換を試みる。他の問題へ移るとか、さまざまな方法があります。私のやり方は平凡で、第一に絶対にあきらめない主義です。がまんして継続することによって、しばしば解決策を見つけることに成功しました。私のもう一つの方法は、常に難しい本質的な問題と、それよりはやさしい問題を平行して研究して行くことです。難しい問題がうまく解けない時、やさしい問題を解く努力をしています。難しいことだけを研究していると、なかなか成果がでない。従って論文も書けない。そのとき気持ちが落ち込んでしまいます。そこで易しい問題に挑戦して解決する喜びを味わって元気を出すようにしてきました。その上で又困難な研究に再度ぶつかっていくわけです。皆さんはどこまでも追求する気迫を持ち続けて下さい。

次に発想を転換して見事に成功した例として、私が近くからずっと見守っていた大研究の発展の経過についてお話してみよう。それは一昨年ノーベル物理学賞を獲得された小柴昌俊さんの例です。先ず神岡鉱山を用いることは抜群な発想でありました。そして弱い光を測定するため世界最高しかも国産の光電子増倍管を沢山そなえました。初めの目的は永遠に安定に存在すると信じら

れている水素の原子核である陽子の寿命は本当に無限かそれとも有限かどうかを調べることでした。しかしなかなか思ったように研究が進まなかったとき、同じ施設や装置を用いて地球外より降って来るニュートリノの測定に発想を転換し、見事に超新星から放出されたニュートリノをつかまえることに成功したのです。1987年2月23日のことでした。これは、初めの研究が失敗したとは言わないまでも、必ずしも大きな成果が得られなかったとき、思い切って他の方向へ研究目的を転換して大成功を収めた例です。これも研究に行き詰まった時、どのように新展開を計るかの参考になるでしょう。

失敗だと思った時、その失敗の原因をさぐったり、その失敗を応用して別の方向に進むことによって多くの成功を収めた例は枚挙にいとまのない程です。私にも何回かありました。研究はうまく行くのはむしろ例外で殆どが失敗でした。でもその失敗の原因を考えると成功のヒントが得られます。まさに失敗は成功の母であると思います。

次に基礎か応用かということ論じてみましょう。日本では応用に関心を持つ人が多いし、応用が重要視されてきました。具体的に皆さんの博士号の数を見ますと総計約1100人中、工学系研究科、農学生命科学系研究科出身の方々は約450人で、理学系研究科出身の180人弱に比べてずっと多い。ちょっと古いデータですが、比にしますと、理学博士、工学博士、農学博士の比は文科省の統計で日本は1:2.5:0.8ですが、ドイツでは1:0.3:0.1、アメリカでは1:0.7:0.1です。日本ではこのように理学博士に比較して工学博士、農学博士の数がドイツやアメリカに比べて圧倒的に多いのです。応用分野が強い。これは日本の産業を強める上で素晴らしいことであり、日本の優れた伝統です。しかし基礎科学や応用科学を通じて基礎的研究が弱いことを心配しています。例えば特許にしても大発明ではなく、小技術改良が多いのです。基礎科学、応用科学にかかわらず、もっと国も、社会も、個人個人も基礎的研究に関心を持つべきであると思います。学術・科学技術全体でより本質的な画期的な考えが皆さんの中から生まれることを期待しております。博士になった皆さんの将来は洋々たるものであると信じております。しかし日本の博士の人々は少々固いところがあります。自分は博士研究の対象とした分野の専門家であるという自信を持つことは正しいことです。しかし時に環境が今までやってきた分野で研究を続けることを許さないことがあります。その時は今まで研究してきた専門で発揮した実力、考える力、分析力、構成力、実行力、完成力を用いて、新しい分野の研究に挑戦していただきたいのです。若い博士諸君にもっと柔軟な考えを持っていただきたいのです。

日本では博士号を持った人々が活躍出来る場所は、大学や研究所であるという考えが強すぎるのです。そのため博士を積極的に採用しようとする企業が少な過ぎます。博士号を持った人が自分のやっていた研究をなかなか離れようとしないうえに企業で評価されにくいこともあ

りますし、大学院の教育の仕方にも問題があります。このような点で日本の大学院教育を少々変えなければならぬと思います。それにしても皆さんが自分の知識や研究経験を幅広く応用していかれるよう柔軟さをお持ちになれることを期待しています。

ここで今までの話と矛盾するようなことを申し上げますが、一つの研究目標を定めたら、先ずは遮二無二猪突猛進して、その分野の世界の第一人者になっていただきたい。その上で視野を広げて行かれることをおすすめします。あまりにも広く関心を持ち過ぎると虻蜂取らずに終わる心配があるからです。あまり勢力を分散させることはよくありません。時間と体力は有限だからです。勿論広く学ぶ態度は重要と思います。特に直接関係のない問題にも、現在やっている研究の手法、成果などが応用できはしないかと、時々注意を払っておくことは効果があります。思い掛けない他の分野で見事に花が咲くことがあるからです。

今日は世界的に評価の時代であり競争の時代です。これは善い面もありますが悪い面もある。特に大きな問題をゆっくり研究することには不適當かもしれせん。でも評価・競争ということが現実盛んに言われている以上、それにめげてはいけぬと私は思います。

例えば論文数で評価するのはいけぬとか、被引用度だけで研究の質を計るなどか、多くの批判を聞きます。私もそのような説に一理あると思うことがあります。しかし絵を画かない画家は存在しないし、歌を歌わない歌手は存在しません。研究者である以上本を書き、論文を書き、特許をとり活躍していることを示さねばなりません。被引用度も高くする努力をすべきです。その上で評価・競争社会を批判すべきではないでしょうか。自分がそれだけの実力を示さないと誰も見向きもしなくなってしまうでしょう。

一つお願いがあります。それは人類にとって害になる研究は絶対避けていただきたいということです。当たり前だと思われる人が多いでしょう。それは幸いにも現在は平和だからです。不幸にしてナチス・ドイツの脅威にさらされたアメリカの研究者は、原子爆弾を作りました。私の親しかった偉大な科学者たちがこの研究に参画しました。又その研究は楽しかったと回顧している人々もいます。でも私は人類にとって不幸なことであったと思うのです。原子力を平和なエネルギー源としてのみ開発し、使用すべきであったと思います。しかし平和な時代と言え、人類に悪影響を生む可能性のある研究対象はいくらでもあります。例をあげれば生物兵器であり、さまざまな生物学の知見の悪用です。クローン技術の発展によって働き蜂人間、女王蜂人間とわけて生み出される心配があります。又生まれた時に遺伝子分析で、これ又働き蜂人間と女王蜂人間とに分けてしまうようなことです。研究者はしっかりした倫理観を持ち、新しい知見が人類の害にならないよう常に自己反省をおこたらないようにしなければなりません。いかなる研究でも楽しいからついその人類社会への影響を忘れてしまう恐れがあります。

そこで時々反省をする必要があると思います。しかし人間は一たん発見すると、それを是が非でも応用したくなります。そこでその応用が人類の害とならないよう常に注意をしていなければなりません。研究が面白い、応用が面白いとだけ思って研究を進めず、時々反省していただきたいし、直接人間社会に関係しない純粋研究に従事していても、やはり人類にどうしたらその研究の成果を返せるかを考えるべきであろうと思います。

皆さんはいよいよ新しい天地にはばたかれようとしています。大きな志を持って狭い日本だけでなく世界を相手に大活躍なさって下さい。そのため健康に十分な配慮をして下さい。研究者にとっては頭より健康がより一層大切だと最後に申し上げておきます。留学の努力が成功した方々も、それぞれの母国で一層母国のために御活躍下さい。そして日本と東京大学のことを時々思い出して下さい。そして又、皆さんの母国と日本を結ぶ掛橋になって下さることをお願い致します。皆さんの将来が成功に満ち洋々たるものであることを祈りつつ、私の講演を終わらせていただきます。

皆さん本当におめでとうございました。



平成15年度学位記授与式

部局長の交代

平成16年4月1日付で部局長の交代がありました。以下のとおり新部局長をご紹介します。

大学院法学政治学研究科・法学部

高橋 宏志 教授

(任期：平成16年4月～平成19年3月)



昭和46年6月 法学部卒業
昭和60年8月 教授 (法学部)
〔所属講座 (研究部門)〕
民事手続法
〔専門分野〕
民事手続法
〔研究内容 (代表的な著書や論文等)〕

『重点講義 民事訴訟法 (新版)』(平成12年、有斐閣)
『新民事訴訟法論考』(平成10年、信山社)
『重点講義 民事訴訟法 (下)』(平成16年、有斐閣)

大学院工学系研究科・工学部

平尾 公彦 教授

(任期：平成16年4月～平成18年3月)



1969年3月 京都大学工学部卒業
1974年3月 京都大学大学院工学研究科博士課程修了
1988年3月 教授 (名古屋大学)
1993年6月 教授 (工学部)
〔所属講座 (研究部門)〕
物質応用化学講座
〔専門分野〕
理論化学

〔研究内容 (代表的な著書や論文等)〕

UTChem- A Program for ab initio Quantum Chemistry, T.Yanai et al., Lecture Notes in Computer Science (Springer) 84 (2003): Multireference Moller-Plesset Method, K.Hirao, Chem.Phys.Lett., 190, 374-380 (1992). 分子理論の展開 (岩波書店)

大学院教育学研究科・教育学部

佐藤 学 教授

(任期：平成16年4月～平成18年3月)



昭和50年3月 東京教育大学教育学部卒業
昭和55年3月 大学院教育学研究科博士課程単位取得退学
平成9年3月 教授 (大学院教育学研究科)
〔所属講座 (研究部門)〕
学校教育学

〔研究内容 (代表的な著書や論文等)〕

『米国カリキュラム改造史研究—単元学習の創造』(東京大学出版会)
『カリキュラムの批評—公共性の再構築へ』(世織書房)
『教師というアポリアー—反省的实践へ』(世織書房)
『学びという快樂—ダイアログへ』(世織書房)
『教育方法学』(岩波書店)
『教育改革をデザインする』(岩波書店)

大学院薬学系研究科・薬学部

海老塚 豊 教授

(任期：平成16年4月～平成18年3月)



昭和44年3月 薬学部卒業
昭和49年3月 大学院薬学系研究科博士課程修了
平成7年8月 教授 (薬学部)
〔所属講座 (研究部門)〕
生物有機化学講座
〔専門分野〕
天然物化学

〔研究内容 (代表的な著書や論文等)〕

天然有機化合物の化学、生物活性、生合成機構

大学院情報学環・学際情報学府

花田 達朗 教授

(任期：平成16年4月～平成18年3月)



昭和46年3月 早稲田大学第一政治経済学部卒業
昭和55年7月 ミュンヘン大学大学院哲学部修士課程修了
平成7年4月 教授(社会情報研究所)
平成15年4月 社会情報研究所長

[所属講座(研究部門)]

社会情報学圏

[専門分野]

メディア研究、ジャーナリズム研究

[研究内容(代表的な著書や論文等)]

『メディアと公共圏のポリティクス』東京大学出版会
『公共圏という名の社会空間—公共圏・メディア・市民社会』
『カルチュラル・スタディーズとの対話』(編著)新曜社
『論争 いま、ジャーナリスト教育』(編著)東京大学出版会

大学院情報理工学系研究科

武市 正人 教授

(任期：平成16年4月～平成18年3月)



昭和45年3月 工学部卒業
昭和62年6月 工学博士(東京大学)
平成5年1月 教授(工学部)
[所属講座(研究分野)]
数理情報学応用講座
[専門分野]
計算機科学・数理情報学

[研究内容(代表的な著書や論文等)]

プログラミング言語(岩波講座ソフトウェア科学4, 1994)

Calculation Carrying Programs, ISPSE 2000.

公共政策学連携研究部・公共政策学教育部

森田 朗 教授

(任期：平成16年4月～平成18年3月)



昭和51年3月 法学部卒業
平成6年4月 教授(大学院法学政治学研究科)
平成16年4月 公共政策学連携研究部・公共政策学教育部部長
[所属講座(研究部門)]
政策政治学講座

[専門分野]

行政学・地方自治

[研究内容(代表的な著書や論文等)]

『許認可行政と官僚制』(岩波書店)
『アジアの地方制度』(編著)(東京大学出版会)
『行政学の基礎』(編著)(岩波書店)
『改訂版・現代の行政』(放送大学教育振興会)

宇宙線研究所

鈴木 洋一郎 教授

(任期：平成16年4月～平成18年3月)



昭和49年3月 京都大学理学部卒業
昭和54年3月 京都大学大学院理学研究科博士課程修了
平成8年4月 教授(宇宙線研究所)
[所属講座(研究部門)]

附属神岡宇宙素粒子研究施設

[専門分野]

宇宙線物理学

[研究内容(代表的な著書や論文等)]

ニュートリノ天文学、太陽ニュートリノ、陽子崩壊等の研究

先端科学技術研究センター

橋本 和仁 教授

(任期：平成16年4月～平成19年3月)



昭和53年3月 理学部卒業
昭和60年3月 理学博士(東京大学)
平成9年5月 教授(大学院工学系研究科)
平成9年6月 教授(先端科学技術研究センター)
〔所属講座(研究部門)〕

インテリジェント材料講座

〔専門分野〕

物理化学、環境科学

〔研究内容(代表的な著書や論文等)〕

「TiO₂ photocatalysis fundamentals and applications」

(共著、BKC、1999)

「光触媒のしくみ」(共著、日本実業出版社、2000)

「現代工学の基礎：材料概論」(共著、岩波書店、2000)

アジア生物資源環境研究センター

武内 和彦 教授

(任期：2004年4月～2005年3月)



1974年3月 理学部卒業
1977年3月 大学院農学系研究科博士課程中退
1995年8月 教授(アジア生物資源環境研究センター)
1997年7月 教授(大学院農学生命科学研究科)

2001年4月～2003年3月 評議員

〔所属講座(研究部門)〕

生圏管理学講座

〔専門分野〕

緑地創成学

〔研究内容(代表的な著書や論文等)〕

「環境創造の思想」(東京大学出版会)

「環境学序説」(共著、岩波書店)

「SATOYAMA - Traditional rural landscape of Japan」

(共編著、Springer)

「環境時代の構想」(東京大学出版会)

気候システム研究センター

中島 映至 教授

(任期：平成16年4月～平成19年3月)



昭和48年3月 東北大学理学部卒業
昭和50年10月 東北大学大学院理学研究科博士課程単位修得退学
平成8年12月 教授(気候システム研究センター)
〔所属講座(研究部門)〕

気候システム研究センター気候モデリング研究部門気候システムモデリング分野

〔専門分野〕

気候物理学、大気物理学、リモートセンシング

〔研究内容(代表的な著書や論文等)〕

大気海洋系の放射伝達理論に関する研究やそれを基礎にしたリモートセンシング手法の理論的研究を行う。それらの成果は、放射伝達計算パッケージに集約され世界的に利用されている。また、これらの研究を実証するために、地上、衛星による観測データの解析を行い、雲やエアロゾルの動態に関する多くの発見を行った。現在は、気候モデリング、衛星リモートセンシング、地上観測ネットワークを総合的に利用した気候研究を実施している。

Nakajima, T., and M. D. King, 1990: Determination of the optical thickness and effective radius of clouds from reflected solar radiation measurements. Part I: Theory. J. Atmos. Sci., 47, 1878-1893.

Nakajima, T., and A. Higurashi, 1998: A use of two-channel radiances for an aerosol characterization from space. Geophys. Res. Lett., 25, 3815-3818.

Nakajima, T., A. Higurashi, K. Kawamoto, and J. E. Penner, 2001: A possible correlation between satellite-derived cloud and aerosol microphysical parameters. Geophys. Res. Lett., 28, 1171-1174.

部局長退任の挨拶

退任にあたって

前大学院法学政治学研究科長・法学部長
菅野 和夫

法科大学院・公共政策大学院の設立、教育評価、COE、法人化、等々に明け暮れているうちに、2年間が過ぎました。法曹養成制度・法学教育制度の一大改革としての法科大学院の設立は、専修コース修士課程、研究者養成修士・博士課程、学部教育などの研究科・学部の教育研究体制の全体的な再編成でありました。また、経済学研究科と一緒にの公共政策大学院の設立ともなりました。これに、東京大学全体の法人化が加わって、誠に大きな変革の波を経験させて頂きました。研究科長の退任と共に定年で東京大学を去りますので、国立大学法人東京大学が、大学として守るべきものを守りつつ、変えるべきものは変えて、発展していくことを心からお祈りいたします。

任期を終えるにあたって

前大学院工学系研究科長・工学部長
大垣 眞一郎

工学系研究科は教員組織が最も大きい部局である。教授会構成員である教授・助教授・講師の人事案件は、ここ1年間では70件を超えている。研究科長はそのすべての案件について説明を受け、教授会に諮る。この手続きの過程で、工学のあらゆる学術分野の歴史、その先端的研究の動向さらに社会との連携の姿を労せず学ぶことができる。研究科長にとっての最高の愉しみである。工学のすべての分野を俯瞰できたという心地よい錯覚に浸っている。

この愉しみの傍ら、大学の本質に関わる古くて新しい課題も強く感じた2年間であった。一つは、最高水準の大学院教育とはいかにあるべきかという課題である。もう一つは、学生諸君の新鮮な活力をいかに大学運営に活かすかである。学生の声は、現在ずいぶん小さくまた潜行しているように感じられる。大学固有のこれらの課題に、大学組織として改めてどのように取り組むかが問われている。最後に、研究科長の職務を間違いのないように支えていただいた事務局・事務部はじめ関連の方々へ心より御礼申し上げる。

「法人化作業を見つめて」

前大学院教育学研究科長・教育学部長
渡部 洋

この2年間教育学研究科長を勤めさせて頂いた。正に、法人化されるまでの疾風怒濤の時代を過ごしたことになる。ところが、法人化が東京大学に何をもたらすであろうかは実はよくわかっていない。その割には本人はあっけらかんとしているのであるが、これはまあ無能で本質を見抜くだけの力量をもたぬ奴だったとあきらめて頂くしかない。しかし、ものの本によれば勝海舟ですら「人間先のことなどはわからない。まして、5年、10年先のことなど、わかる人間なぞいようはずはない。よって、あるのは平生の工夫のみ」と言ったというから、要するに自分には平生の工夫が足りないということでこの点については素直に「すみません」と謝っておきたい。しかし、やれ大学院重点化だ、やれ中期目標・中期計画だ、やれ第三者による評価だ、などとそうでなくても忙しい東京大学人を働かせに働かせて、しかもそれを止むことがない。そういう中にあっても作業をやり切ってしまう忍耐力と実行力と有能さは世界に冠たるものではないか。ただ、米国でプロフェッサー達にこういう作業をやらせたならば優秀な人ほどさっさと辞めていって、残るのは滓ばかりというのは「間違いでない」。

退任にあたって

前大学院薬学系研究科長・薬学部長
桐野 豊

3年間の薬学系研究科長在任中に、関係者の間で長く議論が続いていた「薬学教育年限延長」問題の機が熟し、たまたま国公立17大学薬学部長会議の議長に当たるという巡りあわせもあって、この問題に深く関与することになった。その経緯はここで述べるだけの紙幅がないが、最近ひとまず決着を見た。この間、佐々木総長を初め多くの先生方のご支援・ご協力を賜り、東京大学の一員であることのありがたさを実感した。薬学系研究科では、基礎創薬科学を通じて医療分野の社会ニーズ（特に深層・潜在ニーズ）に応えることを重要な使命と考えているが、これは一研究科でなし得ることはない。東京大学の叡智を結集した総合的な対応が必須であり、また、そうすることによって、必ず、応えていくことができると確信している。学外から来られた方から、日本の大学は組織の体をなしていないという声を聞くことが多かったが、法人化により組織が整うことは間違いのないと思われる。この上は、総長＝役員会と部局長との間に適度の緊張感を伴った協力関係が築かれ、東京大学憲章に則ったactivityが高まることを期待するばかりである。

退任挨拶

前大学院情報学環長
前大学院学際情報学府長
原島 博

2年間、本当にお世話になりました。

いい加減な学環長で、色々ご迷惑をおかけしましたが、多くの方々のあたたかく寛容なご支援を得て、何とか2年間を務めることができました。この2年間は、大学全体に法人化の嵐が吹き荒びましたが、その中で、情報学環が社会情報研究所と合併して、更なる発展へ向けて組織の基盤が強固になったことは、何よりの、そして望外の喜びでした。合併という大事業は、総論から各論になるにつれて通常は両組織の利害が対立することが多いのですが、驚くほど順調に進みました。おそらく夢を共有できたからでしょう。

情報学環はこれからが本番です。教育組織である学際情報学府の新たな設計も始まったばかりです。学環新建物の建築もまだ見えていません。そして何よりも学際情報学の深化と体系化が重要な課題です。これからの新生情報学環そして学際情報学府をあたたかく見守って頂きたい、どうぞよろしく願い申し上げます。

退任にあたって

前大学院情報理工学系研究科長
田中 英彦

2001年4月に情報理工学系研究科が設立されて最初の研究科長を仰せつかり、文字通り0からの出発を経験し、あらゆる規則、内規などを定め、研究科を立ち上げて参りました。ようやく日常的になってきたと思う間もなく、就任3年目の2003年度は法人化準備の大変革の年でした。その間、世襲財産の乏しいぼつと出研究科の悲哀も感じましたが、他部局の方々の理解や暖かい思いやりで、ここまで来たという思いを深くしております。この協調は東大ならではの形態で、この伝統を是非維持してほしいと思っております。情報科学技術は、あらゆる他の分野で共通に使われ、その当該分野を更に発展させる新しい道具、知の増幅器であります。東京大学における情報分野の扱いの如何は従って、東京大学の将来に大きな関わりを持つように思います。今後、東京大学は、その保有する膨大な卓越した人的資源を生かし、世界に冠たる大学として発展して欲しいと考えています。

退任にあたっての挨拶

前宇宙線研究所長
吉村 太彦

東北大学から移動して平成13年度から大役を仰せつかりましたが、私の場合は、本年3月で東京大学を退官ということですので、あっという間に3年間が過ぎ去った感があります。

当初は多少の経験を生かして研究所の若い方々のお役に立てればというぐらいの気持ちで役目をお引き受けしたのですが、赴任の半年後に、神岡宇宙素粒子研究施設スーパーカミオカンデ装置の光センサー半分が破損するという、信じられない事故が起きました。世界トップの研究を日本でとだえさせてはならないとの責任を感じつつ、国民および行政の装置復旧への理解を得る鍵は正確で率直なマスコミへの対応しかありえないと信じて、記者発表と取材に対応しました。

もちろん、つらいことばかりではなく、小柴昌俊先生のノーベル賞受賞という、嬉しいニュースがありました。小柴先生の業績以後も当研究所はニュートリノ物理学の世界に誇る成果を出し続けていることが世に知られることとなり、喜ばしく誇らしい限りです。

法人化を控えて皆様をお願いしたいことがあります。東京大学を筆頭とする基幹大学では慣性が大きく、学内合意に時間がかかる等から思い切ったことを打ち出しにくい状況が生じ得ます。特に、失敗を恐れる余り、消極的に法人化の難局をくぐり抜けることばかりを考えると、10年、20年で大学間のクオリティが逆転する可能性があるかもしれません。このようなことが起きないように、真に実質的なリーダーシップとマネージメントを東京大学に根付かせてほしいと切望します。

退任のご挨拶

前先端科学技術研究センター長
南谷 崇

3年前に、先端研は科学技術振興調整費「戦略的研究拠点」に指定され、国際的に魅力ある卓越した研究拠点創出を目指した組織運営、人事評価、財務制度、知財戦略などの検討を続けて来ました。2年前には、その背中を押すように、法人化調査検討会議の最終報告（緑本）に「非公務員型法人化」が書き込まれ、歴史的な大学改革へ向けて世の中が大きく動き出しました。1年前には、附置研見直しの特別委員会最終報告で「先端研は附置研と比較して遜色ない活動、組織性を有している」と評価され、東京大学の中期目標・中期計画及び組織規則の中で、先端研を附置研究所とする、と明記されました。この間、「世界の東京大学」へ向けた法人化制度設計に関していくつかの提言をしてきましたが、あっと言う間の3年間でした。

この4月に看板は変わりますが、「非公務員型法人化」を活用した真の大学改革はこれからです。現行制度からの移行に細心の注意を要する気の遠くなるような法人化作業をされた総長室、事務局のご苦勞に感謝しつつ、今後は「世界の東京大学」を目指した総長・役員会の改革努力を信頼し、その成果を駒場リサーチキャンパスから見守りたいと思います。ありがとうございました。

「国際・学際・総合」科学の確立の必須条件

前アジア生物資源環境研究センター長
飯山 賢治

国際性、学際性、総合性をキーワードとして「アジア地域で環境と調和した生物生産の実現を目指して、先端的なラボワークとフィールドワークの有機的な結合により、豊かな学際性を持った研究の推進、グローバルな視点を有する人材の養成を図る教育を目指す」。これはセンター設置の目的であり、2004年度からの中期目標に掲げられたミッションである。この間、センターのスタッフは各種の外部資金を獲得し、アジア各地の研究機関・研究者と現地でのフィールドワークを積極的に推進し、それぞれの分野で成果を挙げつつある。

しかしながらこの間の若手研究者の環境、成果主義等、日本の科学技術体制をめぐる状況は、「幅の広い知識をバックグラウンドとした高い専門性」のある研究の推進、研究者の養成を困難にするであろうと強く危惧している。「幅の広い知識」をもとにした学際的な学問の構築には、これまでの数倍のスタッフの努力だけでなく、時間と人事のシステムを含む制度の確立こそが求められているのではないだろうか。

退任に当たって

前気候システム研究センター長
住 明正

本年度をもって気候システム研究センター長を退任することになった。前任の松野先生から引き継いで、9年半勤めたことになる。平成3年度に気候システム研究を立ち上げたときから考えると、13年間、気候システム研究センターにかかわったことになる。

発足時から、世界を意識した研究センターとして展開しようと考えていた。そのため、教官の構成も、東大地球物理学を卒業した人の割合は3割、女性の比率も2割となっている。センターの運営に関しては、「旗を高く掲げて、時代の流れにとりこまれず、毅然と立っている」ような研究センターがそのイメージであった。また、積極的に社会とかかわってゆくことを目指していた。伊藤忠グループとの連携もその一環である。しかし、今となって考えると、その背景には、1967～9年に東大キャンパスで青春を送った団塊の世代としての意地もあったような気がする。東京大学が依然として「闘う知性」の集団であることを願う次第である。



学生部

学生表彰「東京大学総長賞」授与式行われる

平成15年度第2回学生表彰「東京大学総長賞」の授与式が、3月25日（木）大講堂（安田講堂）において行われた。

今回は17件の推薦があり、新たに2名の学外委員を迎えた学生表彰選考委員会での慎重な審査の結果、個人8件、団体2件の計10件が選考された。

式典では、授与式に先立ち、音楽部管弦楽団の奏楽及び坂村健情報学環教授による特別講演が行われた。引き



坂村大学院情報学環教授

続き授与式では、林学生表彰選考委員長による選考結果報告、総長から受賞者への表彰状及び記念品授与、総長の挨拶、各受賞者からの受賞に関するプレゼンテーションが行われ、最後に管弦楽団と今回受賞のコールアカデミーのリードにより列席者全員で応援歌「ただひとつ」を斉唱して幕を閉じた。

授与式の後は山上会館において受賞者をはじめ学部卒業生代表者、修士・博士課程修了生代表者を招待した懇談会が開催され、総長を囲み和やかに懇談が行われた。

個人の部

- ・前田恵理子（医学部卒業）
：解剖実習用マニュアル作成
- ・岡 賢一（経済学部4年）：経済学部最優秀成績
- ・里見 龍樹（教養学部4年）：教養学部最優秀成績
- ・丹沢 秀樹（大学院新領域創成科学研究科修士2年）
：オープンヨーロッパ身障者自転車競技大会でパイロットとして2位入賞、アテネパラリンピック出場権獲得
- ・箕嶋 幸範（大学院医学系研究科博士3年）
：細胞分裂における最後のステップ解明
- ・Chayanis Manusthiparom（大学院工学系研究科博士課程修了）
：国際協力事業団（JICA）第6回国際協力大学生論文コンテスト特選受賞

- ・山口 英斉（大学院理学系研究科博士3年）
：反陽子を生成する新装置建設に貢献、生成された反陽子を精密に測定
- ・高野 順平（大学院農学生命科学研究科博士3年）
：生物界初ホウ素トランスポーターの遺伝子発見

団体の部

- ・音楽部コールアカデミー
：卒業式・入学式への協力、アジアの大学との合唱交流
- ・地文研究会天文部
：大規模、高性能な完全自作プラネタリウムの製作、及び無料公開



東京大学総長賞授与式の様子

学生部

第2次学力試験（前期日程）の合格者、同（後期日程）第1段階選抜結果の発表

平成16年度本学入学者選抜の第2次学力試験（前期日程）の合格者2,758人の受験番号が、3月10日（水）13時頃、本郷構内で掲示により発表された。

また、同時に第2次学力試験（後期日程）の第1段階

選抜合格者の大学入試センター試験試験場コード・受験番号も掲示により発表された。

なお、各科類の合格者数等は次のとおりである。

第2次学力試験（前期日程）合格者数等

科 類	募集人員	合格者数	最高点	最低点	平均点
文科一類	373	373	442.8375	364.3000	385.3269
文科二類	327	329	416.6375	351.9000	368.9225
文科三類	432	435	418.5750	341.4875	361.0693
理科一類	1,025	1,039	450.5625	308.0500	337.4157
理科二類	492	502	426.0625	309.4000	334.8441
理科三類	80	80	459.1125	384.2500	407.5395
合 計	2,729	2,758			

第2次学力試験（後期日程）第1段階選抜合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	倍 率	第1段階選抜			合格者科類別成績		
				合格者数	不合格者数	本学前期日程合格による不合格者数	最高点	最低点	平均点
文科一類	42	1,079	25.7 (18.1)	212	549	318	587	534	546.67
文科二類	38	536	14.1 (8.4)	190	131	215	481	434	446.81
文科三類	53	1,107	20.9 (16.0)	271	576	260	581	529	544.28
理科一類	122	1,968	16.1 (8.0)	615	360	993	500	453	468.15
理科二類	59	610	10.3 (7.9)	300	165	145	494	429	450.22
理科三類	10	155	15.5 (13.1)	52	79	24	498	476	485.33
合 計	324	5,455	16.8 (10.8)	1,640	1,860	1,955			

注：倍率欄の（ ）内は本学前期日程試験合格者数を除いた倍率

学生部

第2次学力試験（後期日程）、外国学校卒業学生特別選考の合格者発表

平成16年度本学入学者選抜の第2次学力試験（後期日程）合格者330人及び外国学校卒業学生特別選考合格者第1種（外国人であって日本国の永住許可を得ていない者）15人、第2種（日本人及び第1種以外の外国人）19人の受験番号が、3月23日（火）13時頃、本郷構内で掲示により発表された。また、併せて、合格者の科類別成績（最高点・最低点・平均点）も発表された。

合格者は、3月24日（水）から27日（土）までの間、郵送により入学手続を行い、3月30日（火）の健康診断及び4月2日（金）からの諸手続を済ませ、4月12日（月）の日本武道館での入学式に臨むことになった。

第2次学力試験（前期日程・後期日程）及び外国学校卒業学生特別選考の志願者数・合格者数等は、次のとおりである。

平成16年度第2次学力試験（前期日程・後期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数
文科一類	415	2,314	1,332	1,304	416
文科二類	365	1,630	1,171	1,154	367
文科三類	485	2,815	1,573	1,549	488
理科一類	1,147	4,686	3,180	3,106	1,163
理科二類	551	2,551	2,026	1,959	564
理科三類	90	635	373	361	90
合 計	3,053	14,631	9,655	9,433	3,088

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成16年度第2次学力試験（前期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	合格者科類別成績		
						最高点	最低点	平均点
文科一類	373	1,235	1,120	1,105	373	442.8375	364.3000	385.3269
文科二類	327	1,094	981	976	329	416.6375	351.9000	368.9225
文科三類	432	1,708	1,302	1,297	435	418.5750	341.4875	361.0693
理科一類	1,025	2,718	2,565	2,555	1,039	450.5625	308.0500	337.4157
理科二類	492	1,941	1,726	1,704	502	426.0625	309.4000	334.8441
理科三類	80	480	321	312	80	459.1125	384.2500	407.5395
合 計	2,729	9,176	8,015	7,949	2,758			

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成16年度第2次学力試験（後期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	合格者科類別成績		
						最高点	最低点	平均点
文科一類	42	1,079	212	199	43	305	250	267.28
文科二類	38	536	190	178	38	294	242	254.24
文科三類	53	1,107	271	252	53	302	233	256.30
理科一類	122	1,968	615	551	124	405	316	347.45
理科二類	59	610	300	255	62	290	222	241.21
理科三類	10	155	52	49	10	325	261	284.00
合 計	324	5,455	1,640	1,484	330			

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成16年度外国学校卒業学生特別選考志願者数・合格者数等

科 類	区分	志願者数	第1次選考 合格者数	第2次選考 受験者数	第2次選考 合格者数
	種別				
文科一類	第1種	11	2	2	1
	第2種	42	10	8	5
文科二類	第1種	30	9	9	3
	第2種	11	6	6	3
文科三類	第1種	8	6	6	2
	第2種	26	15	12	4
理科一類	第1種	52	12	11	6
	第2種	20	13	10	4
理科二類	第1種	13	4	4	3
	第2種	12	8	7	3
理科三類	第1種	3	1	1	0
	第2種	9	5	3	0
合 計	第1種	117	34	33	15
	第2種	120	57	46	19

なお、過去3年間の志願者数及び合格者数、高校卒業年別の合格比率、出身校所在地別合格者及び比率は次のとおりである。

入学志願者数及び合格者数の推移

	平成16年度						平成15年度						平成14年度					
	志願者			合格者			志願者			合格者			志願者			合格者		
	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計
文科一類	1,235	1,079	2,314	373	43	416	1,701	1,130	2,831	545	63	608	1,740	1,209	2,949	544	62	606
文科二類	1,094	536	1,630	329	38	367	1,069	663	1,732	329	38	367	1,189	500	1,689	327	38	365
文科三類	1,708	1,107	2,815	435	53	488	1,487	957	2,444	433	53	486	1,303	750	2,053	433	53	486
理科一類	2,718	1,968	4,686	1,039	124	1,163	2,883	2,124	5,007	1,035	124	1,159	2,677	1,696	4,373	1,032	125	1,157
理科二類	1,941	610	2,551	502	62	564	1,899	661	2,560	499	61	560	2,060	586	2,646	497	62	559
理科三類	480	155	635	80	10	90	362	184	546	80	10	90	406	156	562	80	10	90
合 計	9,176	5,455	14,631	2,758	330	3,088	9,401	5,719	15,120	2,921	349	3,270	9,375	4,897	14,272	2,913	350	3,263

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

高校卒業年別の合格比率

科 類	区 分	平 成 16 年 度			平 成 15 年 度			平 成 14 年 度		
		前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計
文科一類	現 役	75.9%	67.4%	75.0%	67.5%	54.0%	66.1%	70.2%	48.4%	68.0%
	1 浪	22.5	20.9	22.4	29.7	30.2	29.8	26.1	40.3	27.6
	2 浪	1.1	7.0	1.7	1.5	3.2	1.6	2.6	4.8	2.8
	3浪以上等	0.6	4.7	1.0	1.3	12.7	2.5	1.1	6.5	1.7
文科二類	現 役	62.9	63.2	62.9	59.0	65.8	59.7	59.0	60.5	59.2
	1 浪	33.7	23.7	32.7	36.2	31.6	35.7	34.6	36.8	34.8
	2 浪	1.8	5.3	2.2	3.0	2.6	3.0	4.6	2.6	4.4
	3浪以上等	1.5	7.9	2.2	1.8	0.0	1.6	1.8	0.0	1.6
文科三類	現 役	69.7	56.6	68.2	64.4	64.2	64.4	67.0	71.7	67.5
	1 浪	25.5	20.8	25.0	31.4	20.8	30.2	27.0	17.0	25.9
	2 浪	3.7	5.7	3.9	2.3	5.7	2.7	4.4	0.0	3.9
	3浪以上等	1.1	17.0	2.9	1.8	9.4	2.7	1.6	11.3	2.7
理科一類	現 役	69.1	62.1	68.4	69.2	66.9	68.9	68.9	71.2	69.1
	1 浪	28.2	30.6	28.5	28.5	27.4	28.4	27.7	24.8	27.4
	2 浪	1.7	4.0	2.0	1.6	4.0	1.9	2.6	2.4	2.6
	3浪以上等	1.0	3.2	1.2	0.7	1.6	0.8	0.8	1.6	0.9
理科二類	現 役	60.4	72.6	61.7	63.5	57.4	62.9	62.6	53.2	61.5
	1 浪	33.9	16.1	31.9	29.7	29.5	29.6	31.0	38.7	31.8
	2 浪	3.6	9.7	4.3	5.0	3.3	4.8	4.2	4.8	4.3
	3浪以上等	2.2	1.6	2.1	1.8	9.8	2.7	2.2	3.3	2.3
理科三類	現 役	63.8	40.0	61.1	56.3	50.0	55.6	58.8	50.0	57.8
	1 浪	30.0	30.0	30.0	26.3	30.0	26.7	25.0	40.0	26.7
	2 浪	6.3	0.0	5.6	7.5	10.0	7.8	8.8	0.0	7.8
	3浪以上等	0.0	30.0	3.3	10.0	10.0	10.0	7.5	10.0	7.8
合 計	現 役	67.6	63.3	67.2	65.7	61.9	65.3	66.4	62.3	66.0
	1 浪	28.8	24.2	28.3	30.2	27.8	29.9	28.6	30.6	28.8
	2 浪	2.4	5.8	2.8	2.6	4.0	2.8	3.5	2.9	3.5
	3浪以上等	1.1	6.7	1.8	1.5	6.3	2.0	1.5	4.3	1.8

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

出身校所在地別合格者数及び比率

	平 成 16 年 度						平 成 15 年 度						平 成 14 年 度					
	前期		後期		計		前期		後期		計		前期		後期		計	
	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率
東 京	891	32.3	128	38.8	1,019	33.0	951	32.6	135	38.7	1,086	33.2	885	30.4	141	40.3	1,026	31.4
北 海 道	36	1.3	8	2.4	44	1.4	48	1.6	4	1.1	52	1.6	33	1.1	8	2.3	41	1.3
東 北	101	3.7	7	2.1	108	3.5	82	2.8	4	1.1	86	2.6	83	2.8	11	3.1	94	2.9
関 東 東京を除く	468	17.0	52	15.8	520	16.8	522	17.9	87	24.9	609	18.6	491	16.9	93	26.6	584	17.9
北 陸	94	3.4	14	4.2	108	3.5	111	3.8	11	3.2	122	3.7	110	3.8	7	2.0	117	3.6
中 部	275	10.0	31	9.4	306	9.9	288	9.9	23	6.6	311	9.5	292	10.0	25	7.1	317	9.7
近 畿	390	14.1	36	10.9	426	13.8	400	13.7	35	10.0	435	13.3	413	14.2	25	7.1	438	13.4
中 国	132	4.8	18	5.5	150	4.9	147	5.0	15	4.3	162	5.0	160	5.5	12	3.4	172	5.3
四 国	79	2.9	12	3.6	91	2.9	96	3.3	10	2.9	106	3.2	88	3.0	11	3.1	99	3.0
九 州 沖縄を含む	284	10.3	18	5.5	302	9.8	268	9.2	22	6.3	290	8.9	347	11.9	16	4.6	363	11.1
検 定 そ の 他	8	0.3	6	1.8	14	0.5	8	0.3	3	0.9	11	0.3	11	0.4	1	0.3	12	0.4
合 計	2,758	100.0	330	100.0	3,088	100.0	2,921	100.0	349	100.0	3,270	100.0	2,913	100.0	350	100.0	3,263	100.0

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

学生部

平成16年度入学者数決まる

平成16年度新入生の人数は、次のとおりである。

科 類	入学定員	合 格 者 数			入 学 辞退者数	入学者数	募集人員 との差	定員外の入学者数		入学者総数
		一般選抜	特別選考 (第2種)	合 計				国費留学生等	特別選考 (第1種)	
文科一類	415 (605)	416 (608)	5 (8)	421 (616)	0 (0)	421 (616)	+6 (+11)	3 (4)	1 (3)	425 (623)
文科二類	365 (365)	367 (367)	3 (1)	370 (368)	1 (0)	369 (368)	+4 (+3)	3 (4)	3 (4)	375 (376)
文科三類	485 (485)	488 (486)	4 (4)	492 (490)	3 (2)	489 (488)	+4 (+3)	9 (5)	2 (1)	500 (494)
理科一類	1,147 (1,147)	1,163 (1,159)	4 (5)	1,167 (1,164)	10 (3)	1,157 (1,161)	+10 (+14)	14 (23)	6 (7)	1,177 (1,191)
理科二類	551 (551)	564 (560)	3 (4)	567 (564)	9 (8)	558 (556)	+7 (+5)	0 (3)	3 (2)	561 (561)
理科三類	90 (90)	90 (90)	0 (1)	90 (91)	0 (0)	90 (91)	0 (+1)	0 (0)	0 (0)	90 (91)
合 計	3,053 (3,243)	3,088 (3,270)	19 (23)	3,107 (3,293)	23 (13)	3,084 (3,280)	+31 (+37)	29 (39)	15 (17)	3,128 (3,336)

(注) 1. () 内は、昨年度を示す。

2. 国費留学生等の人数には、国費留学生の他に政府派遣留学生、日韓共同理工系学部留学生を含む。



**大学院理学系研究科・理学部
生物情報科学学部教育特別プログラム第一期修了生の誕生**

生物情報科学学部教育特別プログラムは、生物情報科学・バイオインフォマティクスの人材育成を求める各方面からの声に応えるべく、学部学生に情報科学と生命科学の学問的基礎知識を修得させることを目指し、国立大学では初めての生物情報科学・バイオインフォマティクスの学部教育課程として生まれました。文部科学省科学技術振興調整費「新興分野人材養成」により理学部に本プログラムが設立されたのは、平成13年10月でした。翌年度から本格的に始動し、夏季休業期間を利用して3年相当科目の講義と実験がまず実施されました。平成15年度には、更に4年相当科目も始まり、夏学期の平日6限（18時半から20時）と土曜日に講義が開かれました。

3年相当科目には30～40名が、また、4年相当科目には20～30名が参加しました。このうち、3年相当科目の実験2科目と講義（8科目中）7科目、及び、4年相当科目の講義（8科目中）5科目において試験に合格し単位を修得した者には修了証が授与されることになっており、平成15年度が記念すべき修了生誕生元年となりました。第一期修了生は、理学部生19名と大学院情報理工学系研究科大学院生1名の合計20名でした。

平成16年3月26日（金）午後、理学部1号館207号室において、第一回修了証授与式が開催されました。授与式は、岡村定矩大学院理学系研究科長・理学部長と高木利久プログラム実施委員長（大学院新領域創成科学研究科教授）を初めとする本プログラム教官が参列して執り行われ、岡村理学部長から一人一人に修了証が授与されました。修了生の大部分は本学大学院修士課程に進学し、これからやっと研究者への第一歩を踏み出す訳ですが、将来において生物情報科学・バイオインフォマティクスの中核の人材となることが大いに嘱望されます。



岡村大学院理学系研究科長・理学部長の祝辞

本プログラムへの参加は理学部生に限定されている訳ではなく、他学部聴講手続きにより全ての学部及び大学院の学生が参加できます。生物情報科学・バイオインフォマティクスの学問としての重要性と発展性に鑑みて、平成16年度以降も引き続き、より多くの、そして、より多様な学部・研究科の学生が本プログラムに参加することが強く望まれます。尚、シラバスや過去の講義内容、或いは、履修などに関する情報は本プログラムのホームページ（<http://www.bis.u-tokyo.ac.jp>）をご覧ください。



授与式後の集合写真

**大学院農学生命科学研究科・農学部
大学院農学生命科学研究科で留学生を対象に宝井馬琴師匠の英語による講談が実施される**

3月9日（火）、講談師宝井馬琴師匠による、主に留学生を対象とした日本の伝統芸能である「講談」が披露された。はじめに師匠から落語と講談の違いについて説明があった後、「山内一豊の妻」について英語による講談が生き生きと語られ、留学生の中にはまるで目の前で起こっている出来事を見ているかのように感じた者もいたようである。

留学生は、初めて耳にする伝統的な寄席高座を再現した舞台や、講談に用いられる表現に触れて楽しんでいく様子であり、日本史の知識がないと少々わかりにくい点もあったとはいえ、留学生にとっては日本の歴史的・文化的背景に親しみ、興味を持つ大変いいきっかけとなったようである。このような催しはめったにない機会でもあり、留学生のみならず教職員等も多数聞き入っていた。



熱心に聞き入る参加者。後ろには報道関係者の姿も…

引き続き質疑応答があり、留学生から張り扇（はりおうぎ）で講談師の前に据えられた枱（たい）を叩く意味や、張り扇とは別に持っている扇子を何に使うのかといった質

間等があった。また、留学生の1人が舞台上上がり張り扇で釈台を叩いてみたが、同じように叩いても師匠とは音が全然違うのに驚いていた。



馬琴師匠（左）の指導のもと、張り扇で釈台を叩いてみる留学生

最後に日本語による講談も披露していただいたが、今回の行事は留学生が日本の伝統文化に対する関心を深める大変良い機会でもあり、師匠は国際的なレベルにおいて日本の伝統芸能を広めるといって大いに貢献をされたと確信している。

引き続き、本年3月を以って本学を離れる留学生に対し、在学中の労をねぎらうとともに体験や感想を話していただく機会を設ける趣旨で、農学部生協食堂においてフェアウェル懇親会が行なわれ、留学生、指導教官、チューター、教職員等約150人が出席した。

帰国留学生のうち数名から在学中の感想などを語っていただいた後、主催者側から今後も本研究科・学部と同窓生として活躍してほしい旨挨拶があり、盛況のうちに閉会となった。

東洋文化研究所

国際学術雑誌 The International Journal of Asian Studies 創刊記念 シンポジウム「アジア研究のフロンティア」

東洋文化研究所とケンブリッジ大学出版会の共同の事業として、アジア研究に関する国際学術雑誌 International Journal of Asian Studies（ケンブリッジ大学出版会刊行）が平成16年1月に創刊されたのを記念して、国際シンポジウム「アジア研究のフロンティア」が、3月10日（水）に東洋文化研究所にて開催された。

最初に、東洋文化研究所田中明彦所長の挨拶のあと、福岡アジア賞を受賞するなど世界のアジア研究に主導的役割をはたしてきた、Anthony Reid 教授（National University of Singapore）がキーノート・スピーチ“Imagining and Studying Asia in a Globalising World”を行った。その後、Ella Colvin氏（Cambridge University Press）がアジア研究の国際学術雑誌刊行の意義を述べ、パネル「Intra-Asian Networks」では、Paul Kratoska教授（National University of Singapore）の“Hong Kong and Singapore: Imperial Free Ports and Late Colonial Nationalism”と濱下武志教授（京都大学）の“Networks as the Foundation of Regional Economic Growth and Crisis: Remittances by Overseas Chinese and Their Financial Networks in the 1930s”の2報告が行われた。70名以上の参加者と海外からの討論者を含めて、活発な議論が行われた。

その後、レセプション・パーティーでは、総長ともども今後のアジア研究の発展を展望しながら懇談した。



濱下教授のあいさつ

生産技術研究所／大学院工学系研究科・工学部
東京大学生産技術研究所と工学系研究科社会連携推進室が新たな産学連携「未来開拓型連携」をスタート
第一弾として重工重電4社と「持続型社会研究協議会」を発足

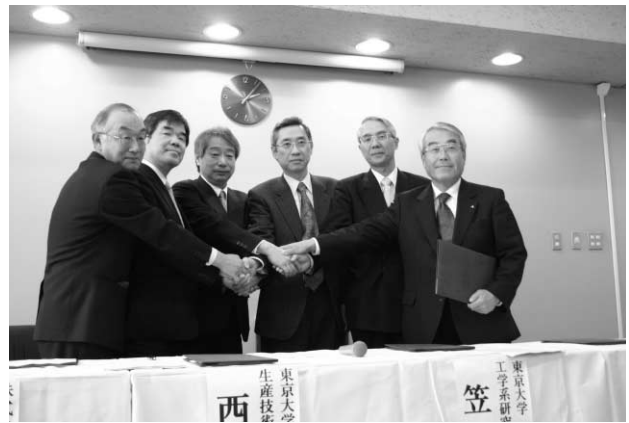
生産技術研究所と大学院工学系研究科総合研究機構社会連携推進室は、大学と企業が対話を行いながら、それぞれの強みを生かして、相乗効果を発揮し、科学技術の向上と産業競争力の強化を通じて広く社会に貢献するために「未来開拓連携」という新しいスキームによる産学連携をスタート致しました。その第1弾として、石川島播磨重工業株式会社、株式会社東芝、株式会社日立製作所、三菱重工業株式会社の4社と、持続型未来社会に対するビジョンを構築・共有し、これを実現することを通じて社会に貢献することを目的として、「持続型社会研究協議会」を発足させ、6者の合意にもとづき、その協議会規約に署名をしました。(平成16年3月29日(月)14時：於 山上会館)

生産技術研究所は、工学領域の分野の壁を越えた融合的基礎研究に加え実技術への結実を目指しています。また、工学系研究科総合研究機構社会連携推進室は、工学及び情報理工学の周辺領域も含めた体系的な教育・研究を担う工学系研究科、情報理工学系研究科の専攻や教官グループの社会連携活動を促進する機能を果たします。今回、工学という共通の領域をドメインとする上記部局が協力して、新たな連携スキームを開始することとなりました。

本協議会の具体的な活動項目は次のとおりです。

- (1) 社会の持続・発展を可能とするビジョンの設定
- (2) ビジョンに基づく未来社会のグランドデザインの策定
- (3) グランドデザインからのバックキャストによる長期的な技術ロードマップの策定
- (4) 上記技術ロードマップに基づく、必要な連携計画の立案と実施

本協議会が取り扱う当面のテーマは、「持続型社会実現のための循環型エネルギー技術」とします。今後、早期に、上記のグランドデザインとロードマップを策定し、社会や国に提言するとともに、本協議会のコミットメントとしてその実現を目指します。



左から、石川島播磨重工業 中川幸也 常務、東芝 東 実 上席常務、西尾茂文 生産技術研究所長、笠木伸英 社会連携推進室長、日立製作所 中村道治 専務、三菱重工業 柘植綾夫 常務。



大学院人文社会系研究科・文学部

第12回布施学術基金公開講演会のお知らせ

シンポジウム・講演会

布施学術基金は、故布施郁三博士のご寄付にもとづき、大学院人文社会系研究科・文学部の研究・教育に資しておりますが、毎年1回公開講演会を開いて、本学教官・学生のみならず、一般の方々にも聴講して頂いております。本年度は21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築」との共催で、下記の通り開催いたします。関心をお持ちの方々に広く聴講していただきたく存じます。

日 時：5月26日（水）16時～17時30分

場 所：文学部一番大教室（法文2号館）

講 師：名誉教授 坂部恵氏

論 題：他者の個人主義―生・死のはるけさについて

主 催：大学院人文社会系研究科・文学部

連絡先：文学部布施学術基金運営委員会委員長・斎藤明

tel. 03-5841-3754

大学院総合文化研究科・教養学部

教養学部進学情報センター主催シンポジウムの開催

「私はどのようにして専門分野を決めたか」

シンポジウム・講演会

日 時：4月23日（金）16時30分～20時

会 場：教養学部学際交流棟3階学際交流ホール

シンポジウムの趣旨と講師の先生方は次の通りです。講演後、先生方との質疑応答の時間も予定しています。ぜひ参加してください。

東京大学は、Liberal Arts を教育の大きな柱にしています。すべての学生は入学して2年間は教養学部にも所属し、その内最初の1年半は、特定の専門にとらわれず、広い学問の基礎を身につけます。その後、進学振分けの際に、自らの専門分野を選ぶ方式をとっています。この仕組みは、大学の入学時に学部・学科を選択しなければならない場合と比べて、選択の自由度も大きく、より自分の適性にあった専門を選択できるという利点があります。しかしその反面、自由なるが故にかえって何を専門とすればよいか迷ってしまう場合もあるでしょう。

今回の進学情報センター主催のシンポジウムでは、「私はどのようにして専門分野を決めたか」を主題として選び、各学部から講師の先生をお招きし、先生が専門

を決めるに至った個人的な体験をお話ししていただくことを計画しました。また、専門を修め、社会へ出てからどのような契機で現在の職業を選ばれたかについても触れていただいた上で、現在の御専門の魅力、将来像について次世代を担う若者にメッセージをお伝えいただければと存じます。本シンポジウムが、学生が専門分野を決めることの意味を問い直し、より広い視野から後期課程への進学を考える契機になればと願っています。

法学部 森田 朗 教授（行政学）

「世界を変える！―社会科学の理論と“公共政策”―」

医学部 清水 孝雄 教授（細胞情報学）

「研究と臨床」

工学部 笠木 伸英 教授（機械工学）

「機械工学、そして乱流との出会い」

文学部 渡辺 裕 教授（美学芸術学）

「音楽好き、音楽研究者に変わるの弁」

理学部 村尾 美緒 助教授（量子情報理論）

「サイエンティストというキャリア」

農学部 井上 真 助教授（林学）

「塞翁が馬」

経済学部 松井 彰彦 教授（経済理論）

「天から地へ、モノからヒトへ」

教養学部 金子 邦彦 教授（複雑系解析学）

「学問分野が決められていることへの違和感について」

教育学部 土方 苑子 教授（教育学）

「研究で人生を考える」

薬学部 福山 透 教授（天然物合成化学）

「人との出会いの大切さ」

問い合わせ先： 教養学部進学情報センター

里見大作教授（内線 46187）

学生部

学生生活関連規程集および新しい学生懲戒処分制度に関するパブリックコメントの実施について

お知らせ

東京大学は、学生生活関連規程集および新しい学生懲戒処分制度に関するパブリックコメント手続き（意見提出手続き）を以下のとおり実施しております。

本件につきまして御意見がございましたら【II 御意見の提出方法等】の要領にてご提出下さい。

なお、ご意見に対して個別には回答致しかねますので、その旨御了承願います。

また、本件につきましては、本学学生、教職員のみを対象者とさせていただきます。

【I 提案の趣旨&内容】

1 提案の趣旨・・・

学生生活関連規程集および新しい学生懲戒処分制度の提案にあたって（必要な場合には、各教育研究部局及び全学センターの担当係でも配布します。）

2 提案の内容・・・

学生生活関連規程集、新しい学生懲戒処分制度の提案（必要な場合には、各教育研究部局及び全学センターの担当係でも配布します。）

1・2に関しましては、東京大学ホームページにて確認できます。

【II 御意見の提出方法等】

1 提出手段：文書、電子メール

※電話による御意見の受付は致しかねますので、あらかじめ御了承下さい。

2 提出受付期間：4月1日（木）～4月30日（金）

3 宛先

文書：各教育研究部局及び全学センターの担当係

電子メール：gakusei-a@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

※電子メールで回答する場合は、標題を「パブリックコメントに対する意見」として下さい。

4 御意見提出記載事項

① 意見

② 氏名

③ 所属（学生の場合は学年も表示）

注1）御提出いただいた御意見（記載内容）は、公表する可能性があることを御承知おき下さい。（氏名等の公表を望まない場合は①～③を記載のうえ、その旨記載願います。）

注2）電子メールにて御意見を提出いただく場合には、メール本文にてお願いいたします。

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第473（4月1日）号の発行

— 教官による、学生のための学内新聞 —

お知らせ

佐々木毅：卓越性の追求こそ課題

浅島 誠：変革期にこそ自己を磨き英智を貯え、そして発信せよ

石浦章一：学生と教員の真剣勝負が始まる

今橋映子：ロラン・バルト展によせて

駒場の美博新時代へ

大森拓哉：学生相談所

幸田 薫：三鷹国際学生宿舎

里見大作：進学情報センター

事務 部：教養学部教官組織・事務部

宮内由美子：留学生と交流を

義江彰夫：美術博物館案内

川合 慧：情報教育棟 駒場の情報パーク

鹿見島誠一：駒場図書館案内

吉岡大二郎：楽器の女王オルガン

石井直方：東京大学検見川総合運動場

— その現在・過去・未来 —

張 漢信：保健センター駒場支所

柴田寿子：第15回関連社会科学シンポジウム

《現代日本における社会空間》をふり返って

〈本の棚〉

遠藤泰生：日米関係史の殻を破る

三谷博著『ベリー来航』

市野川容孝：大学体育養生学研究会編『からだの原点 21世紀「養生（ようせい）学」事始め』

〈時に沿って〉

小島憲道：ある物性化学者の夢

辞典案内：

英語 中尾まさみ／ドイツ語 幸田薫／フランス語 松村剛／ロシア語 安岡治子／ポーランド語 西中村浩／イタリア語 村松真理子／スペイン語 上田博人・斎藤文子／ポルトガル語 木村秀雄／古典語（ギリシア語・ラテン語） 大貫隆／中国語 吉川雅之／国語 野村剛史／漢和辞典 齋藤希史／韓国朝鮮語 生越直樹／アラビア語 杉田英明／ヒンディー語 藤井毅／マレー語 サイフル バハリ アフマッド／現代トルコ語 三沢伸生／ウクライナ語 中井和夫／セルビア・クロアチア語 柴宜弘／ベトナム語 古田元夫／ヘブライ語 上村静／サンスクリット語 竹内信夫／ペルシア語 近藤信彰／

タイ語 ウィチャイ・ピアンヌコチョン／台湾語 小松嵐／モンゴル語 木村理子

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学生課ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。



広報委員会

第47期「淡青評論」執筆者の紹介

第47期（平成16年度）の「淡青評論」は、下記の25名の教職員に各1編の執筆をお願いし、4月の「学内広報」から、順次、掲載します。

担当部局	執筆者
	副学長 藤井 敏嗣
大学院法学政治学研究科	教授 中谷 和弘
大学院医学系研究科	教授 栗田 廣
大学院工学系研究科	教授 越 光男
大学院人文社会系研究科	教授 柴田 元幸
大学院理学系研究科	教授 山本 正幸
大学院農学生命科学研究科	教授 飯塚 堯介
大学院経済学研究科	教授 廣田 功
大学院総合文化研究科	教授 永田 敬
大学院教育学研究科	教授 根本 彰
大学院薬学系研究科	教授 長野 哲雄
大学院数理科学研究科	助教授 寺杣 友秀
大学院新領域創成科学研究科	教授 山地 憲治
大学院情報学環・学際情報学府	教授 西垣 通
大学院情報理工学系研究科	教授 佐藤 知正
医科学研究所	教授 竹縄 忠臣
地震研究所	教授 小屋口剛博
東洋文化研究所	教授 尾崎 文昭
社会科学研究所	教授 橘川 武郎
生産技術研究所	教授 渡邊 正
史料編纂所	教授 榎原 雅治
分子細胞生物学研究所	教授 多羽田哲也
宇宙線研究所	教授 森 正樹
物性研究所	教授 嶽山正二郎
海洋研究所	教授 木暮 一啓
先端科学技術研究センター	教授 大西 隆

平成16年度学内広報の発行スケジュールは下記のとおりです。

号数	原稿締切 (原則第1・3水曜日)	発行日 (原則第2・4水曜日)	配付	備考
1286	/	4月1日(木)	5月配布予定	法人化規則特集号
1287	/	4月1日(木)	〃	人事異動特集号
1288	4月7日(水)	4月14日(水)	4月20日(火)	卒業式・学位記授与式
1289	4月21日(水)	4月28日(水)	5月6日(木)	入学式
1290	5月6日(木)	5月12日(水)	5月18日(火)	
1291	5月19日(水)	5月26日(水)	6月1日(火)	
1292	6月2日(水)	6月9日(水)	6月15日(火)	
1293	6月16日(水)	6月23日(水)	6月29日(火)	
1294	7月7日(水)	7月14日(水)	7月20日(火)	
1295	7月21日(水)	7月28日(水)	8月3日(火)	
1296	9月1日(水)	9月8日(水)	9月14日(火)	
1297	9月15日(水)	9月22日(水)	9月28日(火)	
1298	10月6日(水)	10月13日(水)	10月19日(火)	
1299	10月20日(水)	10月27日(水)	11月2日(火)	
1300	11月2日(火)	11月10日(水)	11月16日(火)	
1301	11月17日(水)	11月24日(水)	11月30日(火)	
1302	12月1日(水)	12月8日(水)	12月14日(火)	
1303	/	12月中旬発行予定		学生生活実態調査特集号
1304	12月14日(火)	12月22日(水)	12月27日(月)	
1305	1月5日(水)	1月12日(水)	1月18日(火)	
1306	1月19日(水)	1月26日(水)	2月1日(火)	
1307	2月2日(水)	2月9日(水)	2月15日(火)	
1308	2月16日(水)	2月23日(水)	3月1日(火)	
1309	3月2日(水)	3月9日(水)	3月15日(火)	
1310	3月16日(水)	3月23日(水)	3月29日(火)	

原稿の掲載について

「学内広報」に学内の情報をお寄せください。

- ・文字数 800字以内(写真がある場合は文字数を控えめにしてください。)
- ・写真には、キャプション(説明文)を添えてくださるようお願いします。



表紙

式服(ガウン)の着用については、2002年10月21日及び2003年1月20日の学研合同会議において了解、申し合せが行われています。(学内広報No.1255、2003.2.13参照)

制定の趣旨は、(一)国際化が進む中で、国際的なマナーとしてしかるべき式服を整える必要がある。(二)法人化を機に東京大学のメンバーのアイデンティティを表現、涵養する、です。

この趣旨に基づき、東京大学の公式行事において式服を着用することになりました。

グラウンドの芝生

御殿下グラウンドが見違えるようにきれいになった。人工芝が全面に敷き詰められ、風が吹くたびに病院付近で舞っていた砂ほこりも発生しなくなった。

関東では砂ほこりは遠い昔から珍しくない。むしろ、砂ほこりが関東の大地を作ったという一面もある。最近10万年ほどの間に富士山から噴出した火山灰が関東の地に堆積し、大地を構成したが、火山噴火は年中起こっていたわけではない。噴火がおとなしい時期には、冬の木枯らしや春先の突風によって、堆積した火山灰が巻き上げられ、さらに遠くに運ばれ堆積するという現象が繰り返されて、関東ロームの大地が作られたのである。

その関東ロームの上にたてられた東京大学の敷地でも、開発が進んで建物が密集し、道路が舗装されるにつれて、砂ほこりが舞う場所は次第に少なくなってきた。本郷キャンパスで御殿下グラウンドが人工芝で覆われるにいたって、ついに砂ほこりが舞う場所はなくなった。しかし、弥生キャンパスにはまだ砂ほこりが舞い狂う場

所が存在する。弥生キャンパスの北端近くにあるサッカー場、テニスコートである。

春先の季節風が吹く時期になるときまって砂嵐が発生し、キャンパスの北端にある6階建ての地震研究所を襲う。地震研究所は古い建物で、昔ながらの鉄サッシのままである。風通しのよい構造のため、窓を閉めていても砂ほこりは研究室内に侵入する。あつという間に、机の上に砂がうっすらと積もった状態になってしまう。地震研究所の職員にとっては迷惑この上もない

砂ほこりだが、北側に広がる住宅地では地震研究所が盾になっているため砂ほこりから免れている。キャンパス整備計画では地震研究所の建物が取り払われて、グラウンドとテニスコートが北端に移動することになっている。この計画が実現すれば、大学の北に広がる住宅地に東京大学が砂ほこりを供給

することになってしまう。関東の自然現象の一つを失うことになっても、弥生キャンパスのグラウンドに人工芝の導入を考えたほうがよさそうである。地震研究所の住民としては、キャンパス整備計画の完成を待たず、今すぐにでも導入してもらいたい気分であることは言うまでもない。

(理事 藤井敏嗣)



(淡青評論は、学内の職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1288 2004年4月14日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学総務部広報課 ☎ 03-3811-3393
e-mail kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
ホームページ <http://www.u-tokyo.ac.jp/jpn/index-j.html>



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO